出藍文庫

7-1

芥川龍之介没後九十年記念合同

「東方の人」

近藤貴弥 編

目次

ひととせ　上海の馬利亜……五
藍もどき　勝手な受け皿……二五
ガルゾ　目覚め……三七
狂史郎　東方邪宗門……四三
ぽんきち　夜来の星……六五
久我暁　魔理沙の形……七三
ガニメデ　くに知らずの赤河童……八三
高坂流　無意識……一〇七
近藤貴弥　或阿呆の一生……一二七
後書き（近藤貴弥）……一四八

ひととせ　上海の馬利亞（マリア）

或秋の夜半であった。上海紅燈区のとある家の部屋で、少しも生気のない灰色をした上海住まいの少女が、暇そうな様子で卓に肘をついて、西瓜の種をかじっていた。

長三――というから、酌婦や芸妓の類だ――の彼女が客を招くこの部屋には、藤の寝台と幾つかの家具、楽器。そして小さな置ランタンが一つあった。

置ランタンのほの暗い光りが、かろうじて、少女の持つ生気のなさを隠していた。が、絢爛豪華な屋外とは裏腹に、より一層、部屋の陰惨な印象を強めていた。

壁紙のはがれた見すぼらしい部屋では、その部屋の陰惨とした印象には不似合いな聖母マリアの肖像画が、埃を被るようにかけられていた。

この少女が、涼やかな瞳を上げて肖像画を見る。その時少女は、両手を広げたマリアから永遠に守らんとする意思めいた物を改めて感得し、次に自然と頭を垂れ、遂には明鏡止水にも似た信仰心を露にした。

少女がマリアを見る度に、長い睫毛の奥に清廉な希望の光が照らされ、彼女の内包する深い闇が一瞬間だけ晴れるのである。が、数秒もするとじきに、また深い闇に包まれた。

彼女の名前は咲夜という。後世「十六夜」という姓を名乗る。が、この時は「紅」姓を名乗っていた。彼女の奇妙な人生に関する一部始終を述べては紙面を埋めつくして尚足りないので省略するが、簡潔に述べるのであれば『殺戮傷害』の四文字である。

その、殺戮傷害の四文字を背負ってきた咲夜が、何故今、長三として口に糊をしているかというと、一重に、大病を患っていたからである。医師の話では肝臓だという。自らの肝臓に巨大な死の前兆が鎮座した時、彼女は殺戮傷害の人生から一転、清廉な信仰に目覚めた。以来、彼女は閨を共にしない酌婦、或いは芸妓として生活していた。

咲夜はその麗容のみならず、気立てや博識に関しても長じていた。

人に曰く『詠花酌月』――詩を詠する花、酒を酌む月なのだという。なるほど、その気立てと博識ぶりは、傾城傾国といかなくてもなお、「瀟洒な美貌」を持っていた。

ましてこの女の瀟洒ぶりは恐ろしいばかりで、肝臓を病魔におかされ生気を失ってなお、暗い部屋に於いては、それが男の庇護欲を強く刺激する始末であった。かくして咲夜は、持つ器量にそぐわない二流ながらも、男の見栄で彩られた心付けによって生活を支えていた。

さて上海にも訪れた正月の波も収まり、地方へと戻っていた出稼ぎ者が帰って来た。久しく眠っていた上海の街が、これまでの活気を取り戻したその夜。咲夜の元へと客が訪れた。

「邪魔するわよン」

覚束ない上海語を使って、挨拶をしてきたのは、赤髪の女であった。

上海租界が近い。異国の人間が来る事は稀でなかったし、老若男女を問わない。近くの店から料理を届くまでの間、咲夜は酌を努めることとなる。

「どちらから?」

「地獄の底よ。寒いったらありゃしない場所」

「お上手ですこと」

アラアラ、クスクスと二人で笑顔を交わした。その後は、近くにいる美丈夫の話などを一つ二つ、愚痴などを二つ三つ話した。ふと、赤髪の女は壁にかかったマリアの肖像画を見た。

「貴方はクリスチャンなのかしら?」

「ええ、おかしいでしょうか?」

「壁にマリア様を掲げるわりには、こんなお商売をしているのだもの」
実の所、咲夜はキリスト教徒とは言い難い一面があった。虚空に浮いていた信仰心が、自らの象徴を求めた時に、偶さか手に取ったのがマリアの肖像画であった。爾来、咲夜はマリアを信仰する独自の宗教心を獲得していた。
「こうでもしないと、薬代も稼げませんので」
「こんなお商売をしてて、きっと地獄に落ちてしまいますわね」
赤髪の女が発した言葉に、咲夜は首を振って否定した。
「きっと、マリア様は天国へと連れていってくださいますわ。でなければ、皆様、袖の下を御受取になる方々と同じですもの」
「あら、そう？」
赤髪の女が少し憂鬱げに微笑むと、古い金貨を幾つか机に置いて帰っていった。幾ばくかの慰みにはなっていた。
「また会いましょう」

ところが一月後、不幸にも、咲夜の容態が急変した。以前より食欲不振は訴えていたものの、これまでは日常生活が問題なく送れていた。しかし今、体調不良として仕事を半休にする日が増え、顔色は日増しに悪くなるばかりであった。

これを聞いて同僚の袁夷光は自家伝統の粉末薬を持参し、大家の張招格なんぞは阿片を持ってきた。ただこれら二つは同居人の紅美鈴が破棄した為、服薬する事はなかった。が、これまでの薬が効果があったかというと、劇的な変化はない。

上海郊外に立つとある商社が建てた洋館に、咲夜と美鈴が住んでいる。紅茶商で財をなした主人が立てた洋館で、その頃から咲夜と美鈴は住んでいた。主人がいなくなってもなお、ここを守っているのは、なみなみならぬ感情があったからである。

美鈴が、咲夜の体内を巡る生命の気を調整して、咲夜の心身に対して治癒を促していた時である。巷でふと聞いた、噂を咲夜に伝えた。

「そういえば、西洋の悪魔というのは、契約をしかけてくるそうですよ。それで、知らない知識を手に入れたり、自分の病気を治したり」

それが、咲夜にとっては、信仰の対象たるマリアを裏切れという言葉に聞こえた。少なからず、隙につけ込んできた、という印象を拭えないでいた。無論、美鈴にその意思がない事は知っている。極めて冷静を装って、いさめた。

「駄目よ。マリア様は今も見ているのですもの。裏切ってしまってはいけないわ」

咲夜は、請うように両手を組んで瞳の奥にいるマリアを想起した。

「めでたし、聖寵、充満てるマリア様。私は今、芸を売って刹那の時を売る生業をしております。殺戮傷害の人生を経て、事此処に到りまして、自らの肝臓を痛めました。ですが薬も効かず、更に病は進み、いよいよ悪魔と契約をして自らの体を治さんばかりの時となりました。私は悪魔にこの信仰を邪魔されてはならないよう心がけて行きたいと思います。さもなければ私は、私の体の為に、御母の聖寵を裏切る事になりますから。ですが、何と申しましても私は迷える小羊であります。いつ何時、修道から外れるかわかりませぬ。天国のマリア様、どうか私をお守りくださいまし。私は、死ぬまで迷う小羊でありましょうから。罪人なる私どもの為に、今も臨終の時も祈り給え。アーメン」

斯くして咲夜は、芸妓として短い時を売る最中にも、自らの信仰心をより強く、より篤くしていった。まず始めに、客からの接近を許さなくなった。詩歌や演奏での接近以外では、例え握手でも許しはしなかった。

「私は充満ちるマリア様の聖寵は裏切れませんので、あまりお近づきになれません」

こうして、自然と客は咲夜から離れていった。時折いる、咲夜の体を欲しいがままにしようとした客からは激しく逃げた。狭い部屋で追い詰められた時なんぞは、両手を請うかのように組んで粛々と祈祷文を読み上げた。こうして、無粋な客の性欲を削いでいった。

両隣から男女の激しい睦言が聞こえる中、虚ろな目をして、上海紅燈区の豪華絢爛な喧騒を眺める日々が続いた。肝臓に鎮座する巨大な死の前兆を抱えながら、咲夜は、西瓜の種を噛み砕いた。ただ時間が漫然と過ぎるだけの日々が、数週間続いた。

さて、雨が強く降る夜であった。体を押し退ける強い風と、溌剌とした心を流す雨が、地元の者も租界の者をも、外出を拒んでいた。広がる水の様に寒さが訪れ、咲夜は藤の寝台に広がった掛布を羽織った。ここに、客の一団が訪れ、咲夜を指名した。

咲夜が相手した客は、異国の者であった。

雨よけにベールを被っていた為か、詳細は掴めないでいた。だが僅かにわかる事がある。歳は十に行くか行かないかという程であろうか。それも、咲夜の心身や器量目当てでくる男ではなく、少女だった。髪は夕暮時の東の空――昇る月に寄せられて広がる、群青の夜空。瞳は、毒蛇に硬められた血液の赤。異国の生まれというのはわかるにしても、この少女が、西洋人なのか東洋人なのかもわからないのが、実に奇妙であった。

少女は、年齢に不釣り合いな、名将然とした戦意と勝利を確信した笑みを浮かべながら、闊々と歩く音を響かせ、一直線に咲夜へと近寄った。雨水に濡れそぼったベールを預かろうかと立ち上がった咲夜であったが、新芽に似た指がそれを制した。

仕方なく、大家を呼びつけて紅木の丸椅子を持ってこさせた。ベールを拭いて着席を促すと、この客人は年相応の仕種を隠す気も無く座り、かと思えば、世の大王かと思わんばかりの尊大な空気を漂わせている。

ポゥッと、線香が灯された。

子供にお酒を飲ませる倫理観は、信仰に目覚めた咲夜にもない。酒ではなく茶を入れた為に、自然と、芸妓ではなく茶会に近い時間となった。

そうこうしている間にも、少女は語りだした。少し視線を逸らして嘲笑まじりのため息を吐いたり、クシャリと顔を崩して大きく笑顔を作る事もあった。或いは、自らの武勇談らしき物を語る時には将軍の名演説にも似た情熱を発し、或いは、元曲を演じる俳優にも似た臨場感をかもしだしていた。

だが、この客が口にする話を、咲夜は理解していない。

租界も近い為、中国語はもとより、片言の会話なら英語と仏語を可能としている。しかし、この客はそのどれでも無い言語で話しかけてきている。まるで無言劇の独演会であった。

だというにも関わらず。

始めは作り笑いを浮かべていた咲夜の顔には、本当の笑顔ができていた。咲夜は、時折このように、女を楽しませる才に溢れた客がいることを知っている。この少女がそうであるというのは驚きの一点であるが、時折いる客と同じだと断じていた。

それに、咲夜がその少女を見れば見るほどに、どこかで見た顔だと思っていた。それが自然と親近感を増す作用を生じていた。咲夜も、片言の仏語英語を口にし、身振り手振りを交えて、愛嬌を振りまいて冗談を述べていた。

この人はどこの人でしょうか。租界に越してきた人でしょうか、それとも、観光で来た人でしょうか。ひょっとしたら越南へ商売行く前にお勉強をしようというのでしょうか。それともそれとも、北京へと勉学に行こうと言うのかしら。……。

咲夜がそんな事を思っていると、少女が空いた茶器をズッと差し出してきた。にやにやと笑って、咲夜にはわからない言葉を一つ二つ言って、もう一度、茶器を差し出した。咲夜が紅茶を濯ごうと茶壺を手に取ると、少女は大きく手を振って否定した。

咲夜が愛想よく微笑を浮かべて小首を傾げると、少女は咲夜の器量を値踏みする薄ら笑いを浮かべながら、手招きを繰り返した。

少女が咲夜自身を欲しがっているという事は明確であった。咲夜にしてみれば、違う店からの勧誘であろうか、という所感であり、西瓜の種をかじりながら再び小首を傾げた。言葉

の違う相手に、仔細を伝えるのは難しい。咲夜は自然と心中でため息を吐いた。

少し苛ついた顔をしてから、少女は、今度は腹を何度かつついた。続いて、開いた手指を何度も裏返す。値踏みするニヤついた笑顔が、咲夜の背筋にゾッとした恐怖を走らせた。

だが咲夜は、大きく首を振って否定した。それでも諦められない少女は、何度も何度も交渉をしかけてきた。遂に咲夜は愛嬌を振りまく気力も無くして、暇そうに西瓜の種をかじりながら、相手が諦めるのを待つしかなかった。

不意に、少女が柔和な、慈悲深い笑みを浮かべた。

目蓋の裏に印象を残す微笑を咲夜が不思議に思った時、雷が何か怒り狂ったかのように落ちた。二度か三度ほど連続しての落雷は咲夜も少女も経験あるが、五度も続いての落雷である。これは珍しい。そして次の一つが、咲夜らのいる妓館の前に落ちた。

衝撃が建物を震わした。その拍子に、咲夜の信仰を象るマリアの肖像画が音を立てて落ちる。大急ぎで咲夜が駆け寄った。手にとって確認し「ああ無事ね」と安心した。その時、咲夜は全てを感得した。

咲夜が見た少女の微笑は、不思議にも、聖母マリアの肖像画に描かれた顔――永遠に守らんとする微笑と生き写しであった。

「どこかで見たことがあったと思ったのは、マリア様と生き写しだったのですわ」

胸を打つ感動に唇を痙攣させ、音も震わせる事もかなわずにそう言った。その言葉を聞いてか聞かずか、少女は更に慈悲深い――永遠に守らんとする微笑を浮かべた。

続いて少女は、手を僅かに広げながら、何か一つ二つ、言葉を述べた。まるっきり意味の通じない言葉であったが、まるで咲夜には奇妙な魔術にでもかかったかのような効果があった。いや、或いはそれは、全ての女を処女に変える美丈夫の艶詩であったのかもしれない。

恋というには余りにも冷静で、信仰というには余りにも情熱的な情動が、咲夜の中で燻っていた精神に火を点けた。咲夜は己の頬を紅潮させ、片方の手で頬を隠すように添えて、空いた震える手で、少女へと手を伸ばした。

少女はそれを恭しく受け取ると、スッ、と力強い意思を感じさせる心強さで咲夜を立ち上がらせた。少女の視線が咲夜に突き刺さる。値踏みされているような、視線で凌辱されてい

るような面持ちであった。自然と、羞恥心が咲夜の体を隠さんばかりに沸き上がる。

それから、咲夜自身の健気な決意はどこかへと消えてしまったかのように、羞恥から来る僅かな身悶えと躊躇いを全身で表現しながら、かといって言葉を用いず、どちらからという事もなく、藤の寝台へと二人して座った。

咲夜が少女の首に手を廻し、少女がその懇願を受け入れるかのようにして、背中に手をまわした。咲夜は、やはり止めようかと肩に手を添えたり、僅かに俯いたりもしながらも、己の熱い羞恥心から沸き起こる吐息を我慢できないと、時折、かぶりを振った。

少女が花を揺らす程の力で咲夜の体を押し倒した。

何故だか、咲夜は体の自由が効かなくなった。喪心したように力なく倒れるだけのこの肉体であったが、かといってその視線は、熱い羞恥心によって温められた、ともすればカキツバタのような匂やかさえ感じられる情熱さで、微笑を浮かべる少女ただ一点を眺めていた。

少女が咲夜の腹に手を添え、一言二言かばかり発した。以心伝心と言わんばかりに、咲夜は無言で頷いた。

音もなく、少女の腕が咲夜の腹部に侵入する。

途端、咲夜の口から熱く、湿っぽい大音声が響いた。少女の手指がピクリとでも動くと、全身の神経が磨かれ、驚いたように踊り始める。思わず敷いた布団を握りしめた。にもかかわらず、なおも握る力だけで破ってしまえと言わんばかりに、咲夜の全身が命じていた。

紅潮した全身は震え、いつしか服は汗まみれになっていた。仰向けに寝ころがった状態で、腹部はそのままに、四肢を中心に踊らせ上半身を身悶えしたものだから、衣服も布団も、彼女が彼女たる『瀟洒』な部分は消し飛んでいるようであった。

少女が微笑を浮かべながら、咲夜の様子を伺った。咲夜の荒く湿った吐息が、虚空に放り出され、無数の雨音にかき消されていった。グッタリと脱力させ、全身からカキツバタの匂やかさにも似た雰囲気を放ちながら、しばし空白の時間を休息に充てていた。

それでも、咲夜の潤びる視線は少女へと救いを懇願していた。

少女の手が先へと続く。今度は遠慮は無い。咲夜がいかな反応を見せようとも、奥へと進んだ。

そして遂に、少女の手は、仰臥したまま情熱的に踊る咲夜の中心に位置する場所へと到達した。少女の指が咲夜の中心部へと振れた時，獰猛な虎が襲いかかるかのようにして四肢を動かして、少女の首に抱きつき、咲夜自身の足を少女の細い足に絡めた。

そのまま、少女が指を動かすこと数度。汗をまき散らし、唇を噛みしめて神経の暴走に耐える咲夜であった。だが、少女が咲夜の奥をまさぐると、より激しい甘い刺激が咲夜の全身を嘗めていく。

いよいよ咲夜が一度、感極まろうとでもいう時、少女の口から何か一言発せられた。そして、ドンッ、と咲夜の体内を強く打つ何かが放たれた。その心地よく甘い衝撃が、咲夜自身を感極まらせ、全身を強張らせ、少女の背中に情痕を残した。

少女が咲夜から手を引き抜いた。ポタタ、と数滴の鮮血が、純白の布団を赤く染めた。

媚羞を含んだ口が喜悦に歪み、香汗を漂わせて未だに懇願している。咲夜は両足を擲げだしたまま気喘吁々として、起きるに起き上がれない。

小一時間が経ち、室内の音をかき消す豪雨も小雨になっていた。咲夜は体を起こして衣服

を整えた後、冷たい板張り床の上に跪き、鷹揚と丸椅子に座る少女へと請うように両手を組んだ。

半眼開いた眼差しは宗教的決意を秘めた心酔と恍惚を持ち、唇は祝詞を口にしながらも、視界に入る細足へと口づけをせんばかりの情熱を持っていた。

「アーメン」

咲夜は、永遠に守らんとする微笑へと祈りを告げた。

咲夜と少女の情熱的な一夜から半年後、咲夜の部屋へと再び訪れた赤髪の女は、咲夜の妓館で卓を挟んでいた。芍薬も使わんとする良い香を使いながら、赤髪の女は琥珀色の酒を飲んで上機嫌にしている。

久方ぶりに見た咲夜は、かつての病弱さはどこへと行ったのか、生気溌剌とした顔で愛嬌を振りまいていた。その容貌、完全に薬を必要としない、健康体そのものであった。

「あら、マリア様はどこかしらン？」

壁にかけられたマリアの肖像画が消失しているのに気づいた赤髪の女が、少し意地悪く言うと、咲夜は、酒瓶とこれまでの愛嬌をその場に置き、一転、真面目な口調で語り始めた。

「私は『マリア様』とお会いになったのですわ」

そこから咲夜は、豪雨の上海で起きた少女との情熱的な一夜を語った。

その話を聞きながら、赤髪の女は一つの事を考えていた。

「私はその女の事を知っている。地獄の裁判官ミノスが罪状を調べる時のついでとして、死因まで調べていたが、その中に、レミリア・スカーレットなる紅い悪魔がいたのだ。傲岸不遜にも、人間世界は須らく我に跪くべし、としている者だ。あの紅い悪魔が、何を思ってか上海を訪れ、こうして、咲夜を病を治したというのだ。それは良い。人間に悪逆するのが、あの紅い悪魔の役割だ。だがそれが咲夜となれば、事情が込み入ってくる。かつて、地底の底にある地獄にて、不老不死と称される女がいた。だが、殺戮傷害の生活を送っていた為に、地獄の裁判官ミノスは今か今かと待ちかねていた。ある時、その女は地獄行きの順番待ちか

ら忽然と消失し、煉獄の七坂を登らんとしていた。全てはマリア信仰であった。それが再び、地獄へと落ちる者らへと参列したのである。この女は『自分の信仰心を蔑ろにした』。たったそれだけの事で、凍てつく永遠の地獄に落ちるのである。その事を啓蒙するべきか、それとも、永久に黙って聖母顕現に立ち会った奇跡の証人としての夢を見させるべきか」

そんな事を考えながら、赤髪の女は琥珀色の酒を一度、口に含んだ。

「それで。貴方はそれから、一度も病が悪さをしなくて？」

「ええ、一度も」

咲夜が、色々と情に迫り人を動かす美貌に、殺戮傷害を躊躇わぬ残虐さと清廉な宗教的決意を浮かべて、笑顔を作った。

《了》

藍もどき　勝手な受け皿

仙人というものは、要するに不老不死を達成しようとする究極の自分勝手だと小野塚小町は欠伸を交えて言った。

相手は霧雨魔理沙と博麗霊夢という郷のお騒がせな人間二人だ。

場所は賽の河原である。幅の広い水平線すら見える長江のごときは、当然三途の川である。

小野塚小町はこの川で渡し守を、つまるところ今生最期に銭を支払うあの相手なのだ。この渡し守という職は死神の業務の一つだそうで、死神である小町は他にもいくつか仕事をしている。その中に、仙人たちを輪廻へ戻すことが含まれているという。

人間の少女二人、服に黒白な喪中柄を年中用いる魔理沙と職業柄紅白というおめでたいそれの霊夢は、その仙人のことを問いに来たのであった。彼女たちは手に手に文庫本を持っている。小町は、ははんとそれを見て頷いた。二人が自分の所へ訊きに来た理由だろう。霊夢が巫女を務める神社に入り浸っている仙人では、この話の答えを出せないだろうから。小町は察して、まあお乗りなさいと留めてあった舟を指す。

「あの自殺者は、この舟の、霊夢が座ったところに乗った」

「ちょっと。折角この舟が運ぶ相手のことを無視していたのに、わざわざ言わないでよ」
「はは、そう言いなさんな」
漕ぎ出す。三途の川を唯一走れる舟からは、月日ある限り行くことの絶えない流れの中がよく見える。外の世界で消えた、消えざるを得なかった生物が、そこかしこを泳ぎ回り大変にぎやかだ。
「さて、その本の作者だが」
「一応知ってるぜ。百年ぐらい前の、有名な作家だってぐらいはな。パチェの図書館にも全集がある。こいつらも、実はそこから持って来たんだけどな」
魔理沙に小町は頷きながら、実はこの話にはどうでもいいと返した。河童の話もあるし、蜘蛛の話もあるし、僧の話もあるし、羅生門の鬼の話もある。だが全く独立して仙人の話は考えるべきなんだと、彼女は言い切った。
「そこに座った時に、みんな聞いた。一つ一つが、あの作者の人生そのものだから、丁寧に聞いたんだ。するとどうだ。仙人の話だけ、全く浮いている。他との連続性は一切なく、た

だそこだけを、その世界だけを表現したときたもんだ。この意味を理解するのに、あたいは四十年ぐらいかけたよ。答えを本人が持っていなかったからね」

舟は此岸から十五間ほど離れて、それから流れの上を目指し出した。

「今なら大方のところは掴めたつもりさ。その結末の違いは、あの男が自分があるべき姿を描いたって、つまらない所に落ち着くんだ」

小町はしかしと続けた。

「どっちがあるべきだとしたか、判るかい？」

「そりゃ、本人が書いた孝行者だろう」

「ちがうわよ。こっちの、元になった方でしょう？」

「霊夢が正解さね。いや、魔理沙から孝行なんて言葉が出るなんてねえ」

「うるさい」

仙人というのは、やっぱり自分勝手なのだ。そんな話を自分勝手な男が見つけ、書いた。世間体と言う執着の中で書けば、自然と結末は孝行者になる。これを彼はどうしたか。嗤っ

たのだ。己自身を嘲笑するためにそれは文章となった。
「じゃあ、元を書いた人間は執着がなかったのかしら」
「執着だらけさ。じゃなきゃあ、文章なんて残さないもんだ。伝えたいことを何とかするために筆を執る。物書きなんてのはみんなそう。伝えることに執着しているんだ」
小町が言うには、そうした執着を捨てることが悟りの門を開くとする仏の道の真逆、執着を集めるだけ集めた形が仙人であるということであった。
「だから、あの桃色仙人も、青色仙人も、最後は己の固執するところに導こうとするだろう?」
桃色に説教されて回っているのが霊夢なのだ。それへの当てこすりのように霊夢には思えた。彼女はこれを包み隠さずに言葉として、小町に応じる。それへの更なる返答は柳であった。
「そう思うのなら、そうなんだろう。捉え方は人それぞれ十人十色でいいんだ。あの男もそう言って舟を降りたよ」

俺が笑うために書いたものだが、それは俺が笑えると捉えているからで、右隣の人間に読ませれば苦しいと言うだろうし、左隣の人間に読ませれば悲しいと言うかもしれない。俺が青酸を呷ったは、俺がもう笑えなくなったからで、そのことはまた別の者から見れば笑える話となるだろう。いずれ自分勝手な話でしかないのだから、世の中という代物は自分勝手に生き抜くしかないのだ。

小町が伝えた、作家が彼岸に渡る際で残した言葉を、魔理沙は船から此岸の河原へ足を付けながら繰り返した。暗誦しようというものではない。どちらの物語の結末でも、主人公は笑えていたのだろうか。人生なんぞ喜劇なのだと他の誰かが言ったことも思い出して、彼女はせめて自分の範囲は勝手に生きてやろうと決めた。結果、畜生となり、地獄の獄卒に痛めつけられるようなことになろうとも、それは知ったことではない。

それから、彼女は隣を歩き出した霊夢のことを思った。彼女も勝手に生きているだろうか。少なくとも、妖怪を轢く時はかなり勝手にやっているように思う。おかげでか暴力巫女だの赤い通り魔だのと呼ばれているのだ。自分勝手の行きつく果てのそのまた先に存在する妖怪

たちからの呼称であるから、彼女は自分勝手なのだろう。ただ、この仮定は一面を示すにすぎないと魔理沙はよく知っていて、いや、知り過ぎていた。

「なあ、霊夢。お前は、仙人になりたいか？」

道はずっと正面に、真直ぐに続いている。蝉時雨の晩夏。この中に魔理沙と霊夢はあった。

「逆に問い返すけれど、魔理沙は魔女になりたい？」

魔理沙は暫くの間、何も言わなかった。黙する間に考えをまとめようと試みた。だが、何の理由付けもなく、ただ答えが出てきてしまう。それは霊夢という存在を知っているせいだとしながら、彼女は額の汗を拭うのだ。

霊夢は魔理沙の答えを待っていた。黒と白のエプロンドレスに押し包まれた胸の内を、霊夢は正確に知るところではない。なんとなく、霊夢という少女の得意とするなんとなくの勘が、おそらく正しいだろう返答内容を告げているが、本人の口から聞きたかった。何もなく歩くしかないこの道には、まだ猶予がたっぷりとあり、待つことはできそうだった。

「なったら。なったらだ。霊夢が殺しに来るんだろうな」

魔理沙の言葉に霊夢ははっきりと頷いた。この郷にある人が人であるための規律のことだ。人でなしという形をとった人間は排除される。村八分などではなく、物理的に消える。それを実行するのも霊夢が務める博麗社の巫女なのだ。

「それもいいかもな」

魔理沙の一言に霊夢は衝動を覚え、そのままに行動する。膝を小槌で叩けば足が跳ねるのと同じことで、手にもっていた本を魔理沙に叩きつけていた。後頭部を見事に痛打している。それも表紙でもなければ背表紙でもなく、角での殴打だった。

「いってぇえ！」

「馬鹿は死んでもと言うから、いっそ妖怪になってくれた方が良いかもしれないわね。むしろ、後腐れせずに済む」

黒い瞳が魔理沙を見据えていた。魔理沙は後頭をさすりさすりしながら、この何も個人的な損得どころか一切の感情を映さない空虚な視線を見返して、そもそもよ、と言葉の続きを口に乗せる。

「私のお師匠様がどういう存在だったか、覚えているわよね？　ハクレイノミコ」
「……叩いたりして悪かったわね」
霊夢は歯切れ悪く謝した。魔理沙に魔法を仕込んだそれは、どうにも性質の悪い存在であった。元から良くない存在であり、今現在となっては姿を現しただけで郷を揺るがす大異変と言えるような厄介の塊である。その師ありて、この弟子ありとするならば、魔理沙は人の体のまま気は既に妖怪であろう。そして、一度ならず自分にとっちめられているではないかと霊夢は俯いてしまう。それは郷に存することを認めたということにもなりかねないことだ。
「おかしいわね」
ああ、おかしい。霊夢は息を吐きだした。
「私が仙人になったりしたら、まずあんたがとっちめに来るんでしょうね。紫あたりにはめられて」
「そういうことだぜ」
魔理沙は軽く笑って見せる。霊夢は救われた気分だった。郷の中で一番の自分勝手である

魔理沙が、人間の範囲にあるのだ。それは実に愉快なことだった。
「それで、最初の質問にはどうだ?」
「なれるとして、今ではない。そうじゃないかしら」
「同じだな。それこそ、自分勝手を通さなくちゃならない時に選ぶものだぜ」
その時は来るはずもないだろうと魔理沙は思う。よって何ということは感じなかった。
その時はいつか来るだろうと霊夢は思う。選択によっては郷から排除される。なかったことにされる。そんな恐怖が、心というものが形を持つならば結露のようにまとわりついている。雫はやがて静かに床へ滑り落ち、やがて床板を腐らせるだろう。だが、霊夢には受け皿があった。彼女もそれに気づいて居て、安心している。この受け皿には名前があるのだ。
「それじゃあ次だ。その仙人様本人に、話を聞きに行こう」
魔理沙の提案に霊夢は頷いた。必要な時に受け皿から精神の推進力に変化するこの存在は、当代の博麗の巫女にとっては文字通りの水先案内人であった。
魔理沙は、あいつら勝手すぎるからなと軽口を叩いていた。話の筋を巧く結着できた安堵

がそんな形で現れたのだ。魔理沙は今で精一杯であると考えている。やらねばならないことを山積みである。だからこそ、死ぬまでにわかる限りの範囲のことに首を突っ込もうとしている。霊夢に訊ねたのもそのためだった。だが巨大地雷だった。身上から、その処理には慣れているつもりだった彼女は、しかしもたついてしまったと感じている。理由は、相手が霊夢であるからに他ならない。妖怪すらも惹きつける魔性を備えたこの巫女が相手なのだから、どうしても深く立ち入ってしまうのだと、魔理沙は内で笑い、外に出さぬよう注意した。この勘に優れる巫女は見抜いていることだろうが、付随した努力も察してくれるだろうという期待である。

「華扇は、そっちの話しかしてくれなさそうね」

霊夢の返答は魔理沙のその通りだった。こうした予定調和の積み重ねをどれだけして来たのかと、魔理沙は思うのだ。そしてこれは更に高く積み上がっていくだろう。

「じゃ、決まったな」

これを合図に、二人は入道が姿を見せ出した空へと舞い上がった。いつもの、幻想郷の夏

36

であった。

《了》

ガルゾ　目覚め

メリーは人の目には見えないものが見えるという。それは「結界の境目」なのだと一人で呟いた。誇ることも疎うこともせず、そのようなものとして受け入れていたのだろうが、最近になりその能力も変容し始めた。生と死を分つものが見えるようになってきたという。道路で、大学で、サナトリウムで、幾度となく白い人影を目にする。このことはメリーに少なからぬ心痛を与えることとなった。

あるとき、歩道で白い人影をまとった男児がいた。メリーがそのことに気付いた数秒後、アスファルトは真っ赤に染まっていた。

あるとき、大学で教授が白い人影をまとって講義に現れた。その暫く後、彼は登山中に滑落して命を落とした。

あるとき、病床にあったときには毎日のように白い人影を見た。それでも、たとえそれが見ず知らずの人であっても、手が届かないのに一向に慣れることはなかった。

運命とやらは日の光のようなものだ。善なる者にも悪なる者にも平等に降り注ぎ、そして気まぐれなのだ。

いつも黙っていた。目を抉りとらない限り、あの白い人影からは逃れられない。

ある日のことだ。相対性精神学の講義の中で、山中で発見されたという一つの資料が提示された。非常に古い紙に書かれたその文章は、ちょうど次のようなものだった。

「私は肉体が朽ち果て、灰燼に帰すことを恐れるものではない。私がただ一つ恐れるのは、私が記した文字が意味を失うことである。

粘土板に刻まれた楔形文字や、パピルスに記された神聖文字は今に至るまでその形を保っている。メソポタミアやエジプトの諸王国が崩壊し、文面は当時の価値を失っていたとしても、意味を失うことはなく、後代の学者達は収集と解読に躍起になるのだ。過去に私だった者たちが著した種々の書物も同じである。科学が主役を飾り、妖怪が舞台の裏に追いやられるようになり、とうに価値を失っているだろう。だが、やはり意味は失っていない。現代の俗人たちにささやかな楽しみを提供することぐらいはできるだろう。

しかし私は意味が永遠にその意味を保つことをやはり信じられないのである。紙の上に記された文字は言うを待たない。人々の記憶はなおさらだ。だとしたら、紙魚が私の書いた文

字を食い尽くせば、その後はどうなるのだろうか。私はそのことを薄々と分かっていながら、こうして文字を綴りつづけるのだ。

私は意味が文字を離れても尚永遠に存在することを願う。そうであるならば私は安心して首を括ることができるであろう」

次の日のことだ。メリーは白い人影が交差点に立っている女児にまとわりついているのを見た。咄嗟に女児の手を引いた。歩行者信号が青に変わった瞬間、けたたましいクラクション音が鳴り響いた。そして二人の手は離れた。女児のいた場所に向かっていたトラックを避けようとしたオートバイがやはり女児のところに突っ込んできたのだ。

メリーは気付いていた。瞳にはこの世のものとは思えないものが映し出されていたからだ。その景色を決して忘れないでおこうと決心した。

こうしてメリーは白い人影がまとわりついた人々に触れ続けた。あるときは狂おしい緑、あるときは煙を上げる山、あるときは永らく侘びた神社。

月日が流れた。メリーは部屋の中で一人、椅子に座していた。初めて白い人影を見た日か

らもう六十年近く経っていた。一人の死も防ぐことはできなかった。それでもメリーは満足だった。メリーはペンを取り、何も書くことなく置いた。そして私に六十年の間に体験した出来事を一つ残らず話した後、目を閉じ、最後にこう呟いたのだった。

「私が見たものは確かに存在していた。決して夢や幻想なんかじゃない。分かってくれるわよね」

《了》

狂史郎　東方邪宗門

それは何時のことでございましたろうか。袴着の髫童もまだ乳付を覚えぬ頃か、さりとて、今は昔と申しますには記憶に新しい――とにかく、この卑しい耳に仄聞致したことでございます。豊聡耳の太子様と、その北の方と、物部の若君とが、それはそれは仲睦まじく御暮らしになっていらっしゃいました。

太子様の御容貌の御優れになることは、かの大唐楊妃、明君に勝るとも劣られず、眉の迫った、眼の涼しい、女のような御顔立ちでございました。そうかと思えば、諸天を奉りて文武を礼賛し、五常と武徳とをもって万民を御導きになるような、剛毅果断なところがございまして、そしてまたそうしたうらうえな性質が、太子様の御姿をいや増しに御美しく見せているのでございます。

かように諸事に秀でた御方でいらっしゃいましたが、こと伎芸と申しましょうか、風月を彩る御心につきましては、聊か風下に立たれるところがございました。と申しますのは、ある時、わが子のごとく御可愛がりになる、秦の何某と申す雑人に請われ、面を御打ちになった時のことでございます。太子様の御寵愛の程は一通りではございませんでしたから、御色

気を御出しになったのでございましょう。いざ打たれんとする面に、その御竜顔を御写しになったのでございます。この限でも無粋の謗(そし)りを免れようもございませんが、更に善くないことに、打ち終えられた面は、太子様の御顔とは似ても似つかぬ、歪な醜貌をしていたのでございます。これを受け取った雑人は余りの動揺に、以来表情を失ったとか申しますが、当の御本人でいらっしゃる太子様は御気付きになっていない始末でございます。太子様はまた笛を御好みでいらっしゃいましたが、御腕前の程は、それは大層ひどいもので、山河に響けば鳥が地に落ち、野に謳えば忽(たちま)ちに草花は枯れ、里に旎(たなび)けば、余りの僻音(ひがごえ)に七日七晩も人戸を閉ざしてしまうと申すではございませんか。万事を心得られる筈の太子様でいらっしゃいますから、こうした欠点がことさらに味噌を御付けになっているのでございます。

　これは太子様が物部の若君を御相手に碁を御打ちになった時のことでございます。

「嘗(かつ)てわたしは山中で笛を吹いたことがある。すると、わたしの笛の音(ね)に誘われた金色(こんじき)の猿が一匹、目の前に現れたかと思うと、ひとしきり舞を披露して再び山奥へと帰っていった。案ずるに、さだめしあれは山の神であったのだろう。わたしの笛の音が山の神の感気を興ぜ

しめたのだ。末代に轟く誉れであるが、さもありなん。この体験にインスピレーションを得てわたしは四猿ちゃんの製作を思い立ち……」

太子様の与太話は御尽きになるところを覚えません。この太子様の御話を、いつもはぐっと堪えて御聞きになっていた物部の若君も、その日に限ってはどうかなされたのでございましょう。ついに痺れを切らし、

「もうたくさんじゃ。毎日毎日、太子さまの愚にもつかぬ妄言ばかり。我はもう我慢なりませぬ」と叫ぶが早いか、碁盤をひっくり返して大音声に太子様を罵倒されたのでございます。

「なんでも、その猿とやらはみすぼらしくも襤褸を着て、その身には角を生やしていたとおっしゃるではございませぬか。きっと山の神などではございませぬ。鬼じゃ。悪鬼が太子さまを嘲弄せんがため、さように舞ってからかったのでございます」

ぽたぽたと碁石が飛び散るその様を、虚を衝かれて茫然と御見守りになる太子様を前に、若君は猶も仰有います。

「だいたいあの四猿は大変な不評でしたぞ。注文は来ないわ、来ても不良品ばかりで突き返

されるわ、しまいには詐欺だなんだと面罵され、あのあとしばらくは里を歩くこともままならぬのでしたぞ」

と、肩をいからせ涙交じりに御愁訴なさるものでございますから、さしもの太子様もあわれと思召したのでございましょう。蒼白い御顔をされながらやっと、すまぬ、と仰有るばかりでございます。すると、その御容子が大変に萎らしく、普段の太子様の御威光を塵にも感じさせぬものでございますから、物部の若君も一層みじめな御心持をなさいます。ついには嗚咽に御胸を詰まらせて、口も利かずに駆け出して行かれました。後に残るのは、倒れた碁盤と、それを取り巻く黒白の碁石ばかりでございます。じっと佇む太子様の御心中はいか程でございましたろう。

それからと云うもの太子様と物部の若君とのあいだには暗雲が漂い、長雨の経るままに、いつしか小さな川を挟んで御対峙なすっていらっしゃいました。とは云い条、古歌に謡われますように、御二方を隔てる澤田川は袖つくばかりに浅うございましたから、その御気持が雨の露程もございましたら、心涙の御意志もかかる荒様とはならなかったものと存じます。然しながら、高橋渡す宮人もついぞ居らぬまま、程なくして、太子様は雷に御身を撃たれて

御隠れになってしまわれたのでございます。

太子様が雷に御撃たれになりましたその訳と申しますのも、なんでも、太子様の北の方が、太子様の余りの甲斐性のございませんことに大層御立腹なされてのことだと、人々は申します。今の世には、菅丞相の怨霊が天神に化けられて雲居を焼かれたなどと噂されますが、実におそろしきは人の瞋恚でございましょうか。それ以来と云うものの、人々はこの北の方の霹靂を畏れ、いな妻だとか、かみ鳴りだとか呼ぶようになった云々と御聞き致します。

丁度その頃のことでございます。里に一人の異装の尼公が現れまして、とんと今までに聞いたことのない、命蓮教と申すものを説き弘め始めました。これも一時随分評判でございましたから、中には御聞き及びの方もいらっしゃることでございましょう。私が初めてその尼公を見ましたのも、やはりその頃のことでございました。その尼公は、かの調伏巫女が睨みを利かせるにも物ともせず、人々の群がるままに数々の怪力乱神の類を起こして見せたので

ございます。人々はその尼公の法力に因み、畏れ多くも、雲居の法師などと呼ばわって居りました。このことについても御話致す必要がございましょう。

事の始まりはある花曇りの日の昼中、御宮に用足がございまして、私が例の、剣呑な山道を歩いていた時のことでございます。山には天狗などの跳梁していると聞きますが、山道はと申しますと崎嶇として居り、たまさかの人通りでございますから、蓬やら葎やらの伸びるに任せ、ただ歩くのにも大儀な有様でございました。まだ嵐気の肌寒い仲春ではございましたが、暫くそうやって歩いて居りますと、身体の芯が熱くなり、小袖がじわりと濡れそぼって参ります。あの辺はそれこそ天狗が塒にして居りますので、早々に歩まねば大変に危いことを承知して居りましたが、そうして我慢しながら歩くにつれ、憊れの方も、一層耐え難いものになって参ります。また暫くそうやって己の慾望と対峙して居りましたが、渓澗の辺に差し掛かり、あの、岩にせかれている水の音を耳にしますと、到底あらがえきれるものではございません。私はやおら道を外れ、腰ほどの高さのある浅茅を掻き分けて、ついに、潺々と流れる川に対面致しました。

凛烈たる流水を期待して居りましたが、思いの外涼しく感ぜられなかったのは、この川に住む河童たちの所為でございましょうか。河童は天狗などに較べ人間に対して友好的であると申しますが、実のところ河童にとりまして、人間などはどのように映っているのございましょう。私はこれまでにも、市で河童を見掛けたことがございますが、あれ程慳貪な生物もそう容易にはございますまい。一度など、通りすがりの童を半ば脅すようにして、使い途の無い石塊を高値で売りつけて居りました。その時の罵詈の数々と云うものも、ここで一々と申し上げるには憚られる程でございます。でございますから、私は河童と申すものには全く信用がならず、いざ川を目の前にしたその時も、近付いたものかと躊躇って居りました。

どのくらいの間そうして居りましたろう——実を申しますと、ところどころ記憶が曖昧になって居りまして、この辺をいくら思い返してみましても、未だに確りと思い出せずに居ります。とにかく、そうして佇んでいますと、矢庭に後ろの藪が音を立てたのでございます。すわ河童かと肝を潰しましたが、振り向いたそこに居りましたのは、豈図らんや、あの藍い裏頭姿の雲居の法師だったのでございます。

法師の――そう云えば、当時はまだ雲居の法師などと呼ばれては居りませんでした。法師の奇矯な噂も、その頃には疾くに聞き及んで居りました。その噂と云うのがことさらに妙で、なんでも法師は、人の失せ物があれば、たとえそれが藁の一片であろうと、持前の法力でたちどころに探し当ててしまうと申します。そう云った訳で里の一部の者はこの法師を信奉し権者と仰いで居りましたが、然し一方で法師はと申しますと、人里に命蓮教を弘めようと云うばかりか、妖怪や幽鬼の類にまで、見境無しに慫慂して廻って居ったと申します。私などもそうした次第を存じて居りましたので、その時、法師に出遇した心中と申しますものも、俄に、背筋を這う汗が一斉に冷気を帯びたような、うなじの粟立つような、河童とはまた違ったうそ寒さを覚えたものでございます。

法師は私を見るや否や、「やあ奇遇でございます。貴台は運がよい。丁度今し方、失せ物を捜して居ったところでございます。手前の見立てに間違いが無ければ、失せ物はこの川の辺に居るようでございます。常なれば庶人の御目に掛けることはございませんに、真に、運がよい」と申しました。思い返してみれば、法師の口振はどこか白々しく、まるで、予め用

意していた言葉をそのまま申していたようにも存ぜられます。法師は下草を踏締めながら、河童の存在など意に介さぬ容子で川に近付きますと、徐に蹲み、川縁に引掛かった深碧の水草へ両手を伸ばしました。すると、私はそれまで全く、光の加減で藻か何かだろうと思って居ったのでございますが、法師がゆっくりと引き上げた水草には、なんと、人の顔と胴体とが附いていたのでございます。私はその、濡れた黒髪が、血の気の無い顔を不気味に際立たせている屍骸を見ながら、動転するでもなく、ただ呆気に取られ、阿呆のように口を開けて佇んでいた気が致します。抑法師との遭遇も突然のことでございましたから、ひたすら、その場の雰囲気に流されるままで居ったように存じます。

さて、先般も申し上げたとおり、この辺の記憶が薄らいで居りますので、残念ながら川での出来事は、これより詳しく申し上げることが適いません。次に覚えて居りますのは、どこをどうやって戻ったものか、里の大路に件の屍骸を寝かせ、夥しい群集の中、声も高らかに触れ散らす法師の姿でございます。おそらく、法師は屍骸を抱えて来たのございましょうが、然し尼の細腕で人ひとり荷ぎ、あの山道を里まで下りることは、到底出来たものではござい

ますまい。あるいは、これも法力の為せる仕業でございましょうか。その後法師が私どもにして見せたことを思えば、そう信じて合点するのも無理からぬことと御承服ねがえましょう。

法師は、「さあ、御用と御急ぎでない御仁らは篤と御覧ぜられませい。道行く御仁も今生無類の見物と御足を止めて御覧ぜられませ」と、調子よく申し出しますと、その軽薄な容子と、傍らの屍骸とが、余りにも不釣合いなものでございますから、最初遠巻きに見て居りました人なども、好奇心が抑え切れなくなったのでございましょう。何ごとかと近寄って参ります。その間も法師は、似たような調子で一層囃しますので、それが呼び水となってまた人を集め、たちまちに法師を囲繞してしまいました。そうして人と人との間にまた人が見える様になりますと、頃合と見たのか、法師は一段と声を張り上げて申します。

「さあ御立会い、この者は手前が先刻川より見出したる無縁の屍。死にたる由は不慥かなれども、五濁悪世の周流なれば、成道出世は望めますまい。さて、供養されぬ御霊は魔道を彷徨い、冥途の果には地獄に落ちる。亡者の国での呵責の苦衷は人道不浄の比にあらず、等活黒縄焦熱叫喚牛頭馬頭獄卒地獄の責苦、阿鼻大城の苦患と申すはこのことに相違ござ

いませぬ。だが御立会い、御案じ召されますな。拙僧卑しくも緇門の端塊なれば、年頃信奉致す命蓮教、その大聖白蓮様の御法力をほんの僅かに頂戴致し、この者を冥莫の淵底より済い揚げて御覧に入れましょう」

そう一気呵成に捲し立てると、法師は屍骸の傍に跪いて、恭しげに額を垂れました。そうして眼をつぶったまま、何やら怪しげな陀羅尼のようなものを誦し始めました。それがどのくらい続いたことでございましょう。法師のまわりに輪を作って、この不思議な加持のし方を眺めている私どもには、かれこれものの半時もたったかと思われるほどでございましたが、やがて法師が眼を開いて、跪いたなり伸ばした手を、屍骸の顔の上へさしかざしますと、見る見る中にその顔が、暖かく血の色を盛返して、やがて苦しそうな呻り声さえ、一しきり長く溢れて参りました。法師は満足そうに、悠然と立ち上がると、紛々たる衆人を前に、

「さあ御立会い、たった今御身らの御覧に入れたるは、命蓮教が大聖、白蓮聖の御力添えを賜り、手前がこの者に懸けた反魂の術でございます。この者の魂魄を冥府より呼び戻したる法力の御験は、御立会いが生き証人でございます。この法力は全くもって、白蓮聖の御力に

依るものでございますから、もし、白蓮聖の御教に帰依し奉らんと欲する御仁が居られれば、その者もいつか修行の末に、神妙なる御法力を頂戴致すことが叶いましょう。さあ、御立会い。御身らの中に、帰命致そうと云う御心持の御仁は居られませぬか。元より聖俗の嫌いはございませぬ。手前が引接致しましょう」と、説教を致しました。

それまで騒然としていた衆人も、説教が終わる頃には皆一様に押し黙り、狐狸にでも化かされたかのように、御互いの顔を見遣って居りました。然しそれも僅かの後、人垣の中から一人の市女笠が静寂を破り、進み出たかと思うと、後は留めようもございません。我も、我もと、回心を求める者が、堰を切ったように殺到致します。中には、涙を流しながら、犬蹲に法師を崇める者まで出る始末でございます。私は空恐ろしくなってその場を立ち去りましたが、暫く歩く中は、沓の子を打つ喧騒が、背後から絶え間なく聞こえて参りました。もっとも、その喧騒も二町ばかり行く頃には遠退き、その日はそれ切りでございました。

私が見た限、屍骸は確かに屍骸であったと存じます。そして、法師の加持によって、その屍骸が息を吹返したように見えたことも、天神地祇に誓って確かでございます。そう申す者

も私だけではございますまい。あの場に居合わせた誰もが、小異はあれど、挙(こぞ)って同じように御話致すことでございましょう。それ程までに、法師の見せた法力には、有無を云わさぬ生々しさがございました。ただ、不思議にも、誰もの記憶が春霞のように縹緲(ひょうびょう)として、何が起こったのか、詳らかなことは一つとして思い出せないと申しますことは、到底無関係とは思い様がございません。法師がどうやって屍骸を荷いで山を下って参ったのか。息を吹き返した屍骸は何者で、その後どこへ行ったのか。私などには皆目検討の付かぬことでございますが、何やら幻術にでもかけられたような、忌わしい気が致したことも確かでございます。

その一件を境に、信者になる老若男女も、追々数を増して参りました。雲居の法師と綽名(あだな)されたのも、この一件が始めであったようでございます。一方で、法師の披露致す仕業と申しますものも、私はその一々を存じ上げませんが、奇跡や説教ばかりでは無いようで、中には面白い風聞もございました。と申しますのは、ある時、森奥の庵に住まう、魔理沙門(まりのしゃもん)なる

妖術士が、腕試しと申して、雲居の法師に力較べを持ち掛けたと云うことでございます。この沙門も類稀な通力で名を聞かせた術士で、日頃信仰に関心の無い者共も大勢集まったそうでございますから、余程の見物でございましたろう。力較べはと申しますと、最初伯仲しているように見えた両人も、俄に法師が優位に立ったと見るや、瞬く間に沙門を打臥せてしまったと御聞き致します。もっとも、その次第を事細かに覚えていた者は、やはり一人として居りませんでしたが、とにかく、これがまた一層法師の名声を呼ぶことになり、その頃になると、法師の噂は里に留まらず、遍く山河や地の底にまで轟いていたとか申します。

然しそう致しますと、本来ならば、里の治平を仕る、かの調伏巫女が黙っては居りますまい。ところが巫女はと申しますと、縦え大路で法師の布教を見掛けようとも、素知らぬ顔で、端から見て見ぬ容子なのでございます。思えば法師の台頭と期を同じくして、巫女の羽振りが聊か賑々しくなって居りましたから、両人の間に何ぞ折衝でもあったのでございましょう。

さて、その調伏巫女でございますが、この巫女が、日頃奉職致す御宮を留守にしていた日のことでございます。私が、あの加持のあった大路を通り掛かりますと、丁度、雲居の法師

が宗徒に向けてつらつらと説教を致して居りました。

「日頃御身らの御覧に入れる法力は、白蓮聖の御威徳があればこそ。然しながら、聖はさる梟悪者の謀りによって、その玉体を異界に封じられて居ります。さる梟悪者とは、何を申しましょう、かの破戒無慙たる調伏巫女でございます。然ればこの程は、御身らの篤信を車馬剣戟と擬えて、かの逆賊の根城へ赴き、その悪業に仏罰を与え悔過せしめようと存じます」

無論、根も葉もない虚言でございましたが、法師はこれが当初よりの胆積りだったのでございましょう。私は我が耳を疑いつつも、気懸かりなものでございましたから、色めく蝟集の中に紛れて、この行方を見届けてやろうではないかと思い立ちました。さて、御宮へ通じる山道も、法師の成せる法力の効験でございましょうか、苦も無く踏破致しますと、程なく、ところどころ丹塗の剥げた、古めかしい鳥居が見えて参りました。そして法師は境内に踏み入るなり、気炎を揚げて、先程と似たような口上を高らかに罵りました。もとより巫女は留守でございましたから、名乗りを上げよう者もいないはずでございましたが――、

その時、拝殿の奥より、

「応」と、勇ましく答えますと、御装束の姿もあたりを払って、悠然と御庭へ御下りになりましたのは、別人でもない物部の若君でございます。

「巫女に要用と参来たれば如何しよう。頃日、天が下の蒼人草を誑かし、盤古の紀を侵さんとする郷愿者じゃな。ぬしら邪宗門の寇ばらめは、我が手にかけて芟夷げてくれようぞ」

若君の御声が境内に玲瓏と響き渡るや否や、雲居の法師は鼻白み、片手を天上へ翳すと、「雲山」と鋭く唱えました。すると、水流の逆巻くような地鳴りを伴い、勃然と空が掻き曇って参ります。そして雲気が飛龍のごとく法師に降り、囲繞したかと思うと、あれと云う間も無く、法師の頭上に天衝く大塊の雲入道が現れたのでございます。若君はその姿を認めるや、「化生者」と叫ばれますと、両の掌を合わせ持前の神通力を揮い、御自身の目の前に、三巴の火焔を御発しになりました。それを法師に向かって飛ばし遣るのと、法師が若君を打たんと、入道に命ずるのが同時でございました。人の大きさ程もあろうかと云う雲入道の拳が、唸りを上げて、若君の放たれた火焔と衝突するや、俄に、焔が紅く膨み、巨大な火柱と

なって立ち昇ります。すると、その火柱に巻かれた雲入道の身体が見る間に霞と散って渦を成し、ついに、旋風を吹き上げながら、怒涛の勢いで放散致したのでございます。その奔流に吹き寄せられ、御宮の屋根瓦やら破風やらが幣と共に舞い上がり、めりめりと棟柱が引き剥がされて参りますのは、遠目に窺って居りました私共も息を詰まらせる程の、凄まじい吹き荒び様でございましたが、その間も若君は、両の足と地とを心張りに、烈風を向こうから御受けになっていらっしゃいました。ところが、折悪しく、飛散した戸板の一枚が、若君を真っ向から打ち据えたのでございます。若君は面喰らい、木端と共に四五間ばかり吹き飛ばされると、拝殿の横の下草の茂った辺に、強かに御身体を打ち付けられ、一しきり呻吟されました。こうなってしまうと、さしもの若君も御進退の遣り様がございません。ようやく風の収まりますと、向かう法師はいつになく怒気の籠もった声色で、「内法を愚弄致す不届き者め、懲らしてくれましょう」と口走り、徐に若君へ近付こうと致しました。

その時でございます。折しも聞こえて参りましたのは、鶏が縊り殺されるような、耳を突裂く、甲高い奇声でございます。いえ、声と申すのは正しくはございますまい。それは他

でもない、太子様の御吹きになる笛の音だったのでございます。それに気付かれた若君は、御隠れになったはずの太子様が、鳥居の向こうから縦容たる足取で歩いて参りますと、「太子さま！」と、歓喜の御声を御上げになりました。太子様は若君に、あの涼しげな眼を御向けになり、満足そうに頷き返されますと、雲居の法師に向き直り、凛然と言い放ちます。

「五色は人の目を盲しめ、五音は人の耳を聾しむ。だが、わたしには真実の音が見えるぞ。慾望にまみれた貴様らの心の音がな。妖しげな術はわたしには効かぬ。姿を見せろ」

太子様のこの御言葉を聞き、俄然、法師の顔が青ざめてゆきます。太子様はその容子を御覧になると、法師を鋭く睨め付けたまま、笛を口に宛てがわれました。そして今一度、あの耳障りな音を勢いよく御吹出しになると、突如、悲鳴と共に、法師の傍らに、墨染めの貫頭衣を纏った、異形な者が現れたのでございます。その者が身に着けているのは襤褸のようでもございましたが、一見したところ法衣などではございません。そして、何より見る者を仰天させたのは、背中に生えた、何とも形容し難い、奇妙な形をした翼でございました。その者が人ならざる身であることは明らかでございましたが、後に聞き及んだところに拠れば、

あの者は旧記にも書かれて居ります、鵺と申す、猿の顔を持つ幻獣であるとか申します。「なんてひどい音色だ、耳が腐る！」と、鵺は姿を現すなり、七転八倒の苦しみにのたうちました。すると、どうしたことでございましょう。雲居の法師のまわりに、これもやはり異形な者共が二三人ばかり、忽然と姿を現したのでございます。

鵺は矢庭に、「やばい、バレた。みんなずらかるよ」と叫びますと、その者らも途端に色を失い、口々に、「えっ、これもう見えてるの？」「逃げろ、逃げろ」「だからこんなの無理だって言ったのに」「はやくしな」「でも宝塔が……」「そんな物あとだあと」「ムラサがいないぞ」「あいつは真っ先に逃げてったよ」「なんだとあのヤロー、自分はもうお役御免だからって」などと、訳の分からぬことを喚き散らしながら、逸散に逃げて行きました。

「ちょっと、あなた達、待ちなさい！」

法師は一喝致しますが、それも全く空に向かって叫ぶようなものでございます。それを御覧になった太子様が、「あの者らを遣い、惑わし居ったな」と可笑しそうに仰有いますと、逡巡の後、法師は、もはやここまでと見たのか、短い舌打ちと共に改めて太子様を見据え、

また、「雲山」と唱えました。

「太子さま、この術は危のうございます」と仰有る若君の警めも聞き止され、太子様は鷹揚に御構えになると、涼しげな眼を一層細めて御微笑なさいました。その間にも雲気は渦を巻き、あの容貌魁偉な雲入道が、法師のすぐ頭の真上に現れます。そして法師が天を仰ぎ、雲入道に何事かを命じようとした、その刹那でございました。天に一条の亀裂が走ったかと思うと、一瞬の轟音と共に、眩い閃光が辺を包み込んだのでございます。私は突然の衝撃に面を覆い盲聾と致しましたが、それも一時のことであったように存じます。やがて、明滅する光が薄らぎ、眼が明いて参りますと、そこにあるのは、悶絶致した法師を前に、恬然と哄笑される太子様の御姿でございました。その時の雷と申しますのは、紛れもございません、北の方の霹靂に相違ございますまい。まさしく、いな妻が雲居を焼かれたのでございます。

かようにして、命蓮教の席巻を企てる雲居の法師らの目論見は潰え、その後、太子様方と里には、以前と変わらぬ安穏とした居常が戻って参りました。ただ、倒壊した御宮に調伏巫女が帰参致しますと、目の当たりにした惨状に頗る業を煮やし、雲居の法師らのみならず、

太子様と物部の若君までもが、巫女に手酷く痛めつけられたと御聞き致します。然し、これはまた別の御話でございますから、他日、折がございました際にでも御聞かせ致しましょう。

《了》

ぽんきち　夜来の星

とある夏の夜であった。

フランドール・スカーレットは、窓の外にちらと目をやった。かつて紅色の幻想に包まれた辺境がそこにはある。姉であるレミリア・スカーレットが先日起こした異変、大きく膨れ上がった紅い月を思い出していた。

フランドールはその時に人間――正確には館のメイドである十六夜咲夜以外の人間の雰囲気がどのようなものであるか初めて感じた。が、実際に目の当たりにしたのは、今夜がまた生まれて始めてであった。だから彼女は弾幕を飛ばしている、その中でも半ば上の空のような気持ちだった。それ程彼女の胸の中には、愉快なる不安とでも形容すべき、一種の落着かない心もちが根を張っていたのであった。

「なんでこんな館の攻撃が激しいんだ?」

その白黒の服を纏った人間がとっくに気づいていたであろう疑問を改めて口にしたのをきっかけに、隠れていた自らをその前に踊り出させた。

「なんかお呼びかしら?」

「呼んでないぜ」
「おまたせ」
フランドールは平静を装っていたが、それもきっと隠しきれていなかったようだ。そんなことは、いくら彼女が無知であろうとも白黒の顔を見れば明らかであった。
「あんた誰？」静かに歩み寄る。
「フランドールよ、魔理沙さん」
軽口を叩きながらも血の色が、頬に上って来るのを意識した。人間とは食材である。少なくとも吸血鬼にとってはそうであり、生きた人間を観たかった気持ちは珍獣を観たいそれと似たようなものであったはずだ。しかしこの人間の少女、魔理沙は自分と何ら変わりはなかった。フランドールの中で人間へ対する興味が更に拍車がかかったのを確信した。
「そんなに人間が珍しいか？」
「ええ。ぜひ遊びたいわ。どんな感じなんでしょう、やっぱりお姉さまより弱いの？　すぐ壊れちゃったりするの？……ねぇ、一緒に遊んでくれるのかしら。」

「いくら出す？　それによって考えてやろう」
「コインいっこ」
「一個じゃ、人命も買えないぜ。それともここのお嬢様はワンコインランチがお好きかい？」
「夕ご飯はディナーだし、技術によってはワンクレで延々と遊べるのよ。心配ご無用。あなたが、コンテニューできないのさ！」
そうしてフランドールは魔理沙と弾幕を飛ばしあいを始めた。レミリアの妹らしく、次々とテクニカルにかつ美しく弾幕やスペルを唱えていく。しかし魔理沙も場馴れているのか……巧に彼女をあしらって、軽々と舞い、飛んでいた。そうして時々彼女のスペルであろう、火力満点のボムを飛ばしてきた。
打つ、かわす。かわされる。姉や館の住人は時々遊び相手をしてくれたが、こんなに真剣に相手をしてくれたのはとても新鮮で、手加減どころかこちらも集中しないと被弾してしまいそうだ。

ありとあらゆるものを破壊する程度の能力を持ったフランドールには、それが可笑しくもあれば、同時に又誇らしくもあった。初めての、姉に与えられた以外の、自分個人を見てくれている相手。彼女の華奢な七色の煌めく羽根は、一層身軽くなめらかに空間を滑って言った。

どれくらい経ったであろう。力も齢も上回ってあるであろう吸血鬼の少女はついに一人間に敗れたのであった。

「さー、満足した？」

「嘘みたい……。私が負けるなんて。」

するとその人間は窓の外を一瞥して、息を整えながら、疲れて腰を落とした彼女に手を差し伸べた。

「あぁ、わりと嘘かもな」

「もう帰るの？　雨は止んだみたいだけど」

「あぁ、もう少ししたら」

「じゃあ、おやつ、一緒に食べてからにして。持ってこさせるわ」
「人間以外なら」
魔理沙は連れられるまま館の食堂らしき所へ連れていかれ、先日会った……正確に言うと弾幕を交えたメイドの持ってきたアイスクリーム（今日の彼女のおやつらしい）を共に食すことになった。
「お姉様は、私を地下に閉じ込めておいたの。四百九十五年も」
「あぁ」
「だから、お客さんを見たのは初めて」
「うん」
「人間も、あんな綺麗に弾幕を避けるのね」
「お前も綺麗だったぜ。――打つ方だけど」
「ふうん」
ポン、とフランドールは、窓の外に向かって小規模な弾を出した。

それは先ほどの本気の弾幕ごっこと違い戯れのようなものだったが、夏の夜に消えていく様はさながら花火であった。
「あぁ、満足したわ。でも……また一人になるのね」
She died by the bullet and then there were none、と呟きアイスクリームの匙をくるくる回す。
「おいおい、本当の歌を知らんのか？」
魔理沙は呆れたように言う。
「何？　本当って」
「何だか当ててごらん」
「一人が首を吊って……」
「首吊り死体は醜いぜ。お前は死ななそうだけど」
本当は、と続ける。
「She got married and then there were none……」

「？　誰とよ」
「神社の娘でも紹介するぜ」
「それって今度、お外に連れてってくれるってことかしら？」
「そうとも言う」
　返事をする代わりに、フランドールは羽根をぱたつかせた。
「楽しんでこその人生、いや人妖生だぜ」

《了》

久我暁　魔理沙の形

霧雨魔理沙の葬儀が行われた夜、博麗神社ではしめやかに魔理沙を偲ぶ宴会が開かれていた。一人の老女は、その輪に混じることなく縁側で星見酒とばかりに一人杯を傾けていた。星明かりに照らされた彼女の顔には深い皺が刻まれ、かつては黒い絹糸のようだった髪も、今では雪が降りたかのように真っ白だった。

真っ暗な夜空には宝石を散りばめたように星々が瞬いていた。それはまるで在りし日の彼女の弾幕のようにきらきらと輝いている。

「あっ……」

闇夜の絨毯を切り裂き、大きな尻尾を伸ばして走って行く星があった。その星屑のきらめきはまるで幻想曲のように、老女の胸を打つ。

感傷的になっている。老女は今やはっきりと認識していた。そんな自分を笑い飛ばそうとするが、変な泣き笑いを浮かべそうになってしまう。誰かに見られているわけではないが気恥ずかしかったのだろう、彼女は誤魔化すように杯をくいと呷り、そして盛大にむせた。

「……湿っぽいのは似合わないねえ」

誰に語るでもなくそう呟く。勿論、答えが返ってくるはずもなく、老女の耳に入ってくるのは室内の喧噪だけだった。宴会はどんちゃん騒ぎとは言わないまでも、幻想郷の住人らしく、わいわいとした歓談へと移り変わり始めていた。その声は妙な心地よさを彼女に感じさせるのだった。

老女は再び杯に酒を注ぐと、遠くに聞こえる喧噪を肴に先刻と同じように星見酒を続けていた。そんな彼女を見下ろす星の輝きは、燦然として躍動するようであった。

しかし、そんな時間も長くは続かなかった。

室内の喧噪、というよりは女の叫ぶような声が遠くなり出した老女の耳にもはっきりと届いていた。彼女は億劫ではあったが、身体全体を動かして向き直った。

視線の先には、出会った頃よりは幾分か大人っぽくなった紫もやし。妖艶な魔女という風情がぴったりなパチュリー・ノーレッジが何事か喚いていた。いつになく冷静さを欠いた彼女の姿に、老女は訝しげに首を捻るが、足下にゴロゴロと転がっている酒瓶に気付いて、得心がいった。勿論、普段は青白い不健康そうな顔も真っ赤に染まっている。

その正面で論陣を張っている、というよりも一緒になって喚いているのは、アリス・マーガトロイドだった。出会った頃とまったく変わりがない西洋人形のような少女である。こちらもパチュリーと同じように赤ら顔を晒していた。

幻想郷の三魔女、今となっては二魔女になってしまったが、そんな彼女たちが醜態をさらしているというのに、周りにいる幻想郷の住人たちの目は、どの者もいつになく優しかった。むしろ、思うがまま好きなようにさせている風があった。

「大体、あの黒いのは魔法使いとしては失格だったわね」

「そうね、まったく魔理沙ときたら魔法使いの片隅にもおけない人だったわ」

パチュリーの言葉に、アリスはさも当然とばかりにうんうんと頷きながら追随する。老女はそんな二人を眺めながら、白髪を揺すると顎に手をやって、何やら考え込むようにしていた。

「そりゃあ、弾幕は美しかったし、人間らしい胆力と成長力は、我々時が止まった魔女には真似できる代物ではなかったわ。実際、初めてあの黒いのが館を訪れてから、僅かな間でめ

きめきと力をつけていったのは分かったわ」
「確かにそうね。私が魔理沙と初めて会ったのは、まだ時を止める前だったけれど、次に出会った春の異変の時には、まったく別人のように変わっていたわね」
老女は懐かしい魔理沙の顔を思い出して優しく微笑んでいた。二人の言うように、負けず嫌いだった魔理沙は諦めることを知らない女だった。
「でもね」パチュリーは瞳を閉じて、少し言葉をためてから、再びアリスに視線を向けた。
「この終わりは魔法使いとしてはありえないし、何よりもあの黒いのらしくはないわ」
「そうね。のうのうと年老いて死ぬなんて、魔理沙らしくないと思うわ」
「そうかねえ?」
縁側からの咎めるような言葉に、パチュリーとアリスははっと縁側の方に視線を向けた。老女の皺まみれの顔の中に、鋭く咎めるような光があった。
二人は老女の方をじろりと見返すと、「何か反論でもあるのかしら?」と言わんばかりに鼻を鳴らした。

「別に。あんたたちのご高説を拝聴していただけよ」
皮肉げな微笑を湛えたまま老女はそう言った。
「へえ、貴女がそんな物言いをできるようになるなんてね、伊達に年は食っていないという事かしら？」
「おかげさまで老醜を晒しているわ」
自嘲めいた物言いだったが、老女の言葉はむしろ誇らしく場に響いた。先程まで、やいのやいのと騒いでいた宴席の者達も、三人のやり取りを固唾を呑んで見守っていた。
「そうね、貴女も無為に年をとることを選んだ人間だったわね」
「無為かどうかはあんたが決めることではないと思うんだけど」
老女の険しい声に、パチュリーは動揺を隠すことができなかった。
「確かに……。余計なお世話だったわね。それを言って良いのは私達ではなかったわね」
「で、貴女は、何を私たちに言いたいのかしら？」
アリスが一歩前に立って老女に問い掛ける。

「そうだねえ。あんた達と魔理沙の仲はよく知っているからねえ。魔法使いとしての魔理沙をどれだけ罵ろうとも好きにするが良いさ。……ただ、ね。昔馴染みの者として、ちょっと聞き捨てならない言葉があってね」

「何よ、それ？」

「魔理沙が自然のままに死んだことが魔理沙らしくないってことよ」

そう言って老女は一つ白髪を掻き上げた。決して様になる動きではなかったが、二人に在りし日の異変を解決していた頃の姿を思い出させるくらいには凛々しかった。

「老いに任せるまま死を選ぶというのは、魔法使いにとっては片隅におけないし、魔法に対してだけは真摯であった魔理沙の態度としては、おかしいと思うののどこがいけないのかしら？」

「魔法を志す者であれば、研究にはどれだけ時間があっても足りないのは貴女でさえ分かっているはずよ。そしてそれを避ける道筋があることも。ここにいるアリスが体現しているんだから、あの黒いのだって知っていたはずよ。それでいてそれを選ばないというのは、やは

りあの黒いのの行動としては違和感があるわ」
アリスとパチュリーの二人がかりの強弁も、老女にとってはどこ吹く風であった。
「そうじゃないわ。魔理沙はどこまでも魔理沙らしくあったと、私は思っているわ」
「あの生き汚い女が、大人しく老いを選んだことのどこが『らしい』っていうのよ？」
老女の言葉に、アリスがすぐに反駁する。横ではパチュリーがうんうんと首を振っている。
「魔理沙は昔言っていたわ。『私はどこまでも足掻いて生きる』って。そんな彼女があっさりと年老いることを選ぶなんて、それこそあり得ない話じゃない」
「ふぅん。あっさりねえ」
老女の返答に含むところを感じ、機嫌悪そうに目配せし合う、アリスとパチュリー。
「はっきりと言いなさいよ」
「別に。でも、そうね――。魔理沙はそんなことを言っていたのね」
「ええ、言っていたわ」
アリスとパチュリーは一様に首を縦に振った。

「やれやれ、『足掻く』ということに、あんたたちとは見解の相違があるようだねえ」
溜息を吐く老女。わざわざ説明をするまでもないだろう。そう言いたげであった。
「どういうこと？」
「あんたたちは頭は良いけど、馬鹿だねえ。というか、そんなことが分からなくなるほど、酔ってるのかしら？」
勿論酔っているは酒精にではない。暗にそう告げている霊夢の口ぶりに、二人はそろって唇を歪めた。
「あんたたちは言ったわね。魔理沙は『私はどこまでも足掻いて生きる』って」
「ええ、言っていたわ。それだったら天命に抗って生きるものだと思うのだけど」
アリスは大きく肩を竦めながらそう言った。
「そうね。でもね、足掻いて生きるってのは、別に死なないってことが全てではないわ」
「どういうことかしら？」
パチュリーが首をひねる。

「魔理沙というのは、たとえ敵わない相手であっても立ち向かっていくような女だったわね」
「――え、ええ、そうね」
「戦法として逃げることを選択したとしても、本当に逃げてはいけないものからは逃げなかった女よね」
「……そうだったわね」
「そして、今、逃れがたい死という運命を前にして、それから逃げなかったわけよね」
「だから魔理沙は――」
霊夢は、白髪の奥に皓々と光る瞳を二人に向けて言い放った。
「だから魔理沙はどこまでも魔理沙らしく生き抜いたと思うわ」

《了》

ガニメデ　くに知らずの赤河童

一　藤原妹紅及び上白沢慧音の語り

命蓮寺が出来る前から、人里には共同墓地がある。命蓮寺を建てるにあたって住職の白蓮はその墓地の管理も申し出たため、里の人間は大体命蓮寺の墓地か共同墓地のどちらかに入るのだろう。さてそんな白蓮が、朝早く共同墓地の掃除に来た時であった。

「あら……」

見知った青みのかかった銀髪が目に入った。人里の半獣、上白沢慧音だ。共同墓地の一番端の墓に、静かに手を合わせている。顔を上げたところで白蓮は声をかけた。

「もし、上白沢様」

「……聖殿？　ああ、清掃ですか。いつもありがとうございます」

「いえいえ。ところでそちらのお墓は、血縁の方で？」

「いえ……言ってしまえば、無縁仏です。一部の外来人や里の人間はここに入っています」
だから少し大きいんですよ、と慧音は付け足す。確かに法名や家の名前は掘っていないが、並ぶ他の墓に比べれば随分立派だ。幻想郷では無縁仏は少なくない事なのだ。そう感じた白蓮も、無縁仏の墓に手を合わせる。経こそ唱えなかったが、気持ちは伝わった筈だ。静かに顔を上げると、自分の桶から道具を取り出す。
「手伝いますよ」
「よろしいのですか？」
「今日は寺子屋も休みですので……そういえば、私はまだ聖殿ときちんとお話したことがありませんでした。後で宜しいですか？」
「ええ、勿論」
白んだ空に日が昇るまで、二人は墓の掃除に励む。途中で通りすがった妹紅も捕まえて、共同墓地を掃除し続けた。昼前まで掃除を続け、慧音と妹紅は命蓮寺で一休みすることにした。命蓮寺の一室に通され、茶と茶請けが出てくる。

「……慧音、私帰っていい？」
「ダメですよ妹紅。貴女も私ほどではないですけど、幻想郷に詳しいじゃないですか」
「え、慧音が話題を振るんじゃないの？」
「勿論私から聖殿にお伺いする話もあります。しかし、聞きたい事が多いのは聖殿の方でしょう」
「恐れながらその通りです。しかし上白沢様の話や藤原様の話にも、大変興味があります」
「う、藤原様はやめてよ。むずむずするわ」
妹紅が慣れない呼び方にむずがっているが、気にしたら負けだ。慧音は妹紅をほっぽって、聖に話を振った。
「聖殿、それでは」
「ええ。ではまず……」

その後しばらく、慧音と白蓮の歓談は続いた。途中で抜け出そうとする妹紅を取り押さえ

つつ、一時間ばかり話し合って昼食も頂いたところである。
「そういえば、あの無縁仏について上白沢様はお詳しいですか？」
「……？　何か、気になる事でもありますか？」
「私も尼僧の端くれですので、なるべく檀家の方の事は知るべきだと思っております。しかし無縁仏となると、中々知る機会も無いですので……」
「確かに。ですが、無縁仏は数が多いです。流石に全員は、私も覚えていませんね」
「では、特に縁のあった方などは……？」
「やっぱ、あいつかしらね」
　唐突に、妹紅が口を挟んだ。ずっと興味なさげに胡坐をかいていたが、手で体を支えながら、胡坐のままずずいと二人に寄ってくる。
「あいつ？」
「河童の里に行ったって言ってたあいつ。幻想郷の河童らしいけど、御阿礼の子の記述と違い過ぎて誰も信じなかったやつ」

「妹紅」
「ん？あだっ！」
妹紅に慧音の激しい頭突きが炸裂。妹紅は額を抱えてのたうち回った。白蓮がおろおろする横で、慧音は腕を組んで鼻を鳴らす。
「いくら何でも歯に衣着せなさすぎだ。少し反省しろ」
「おお……ここ数年で一番の一撃……」
のたうつ妹紅を尻目に、慧音は白蓮に続ける。
「しかし、確かに私の記憶する限り、妹紅の言う彼女が最も印象に残っているのは事実です」
「女性だったのですか」
「ええ。少し長い話になりますが……よろしいでしょうか？」
「勿論。是非ともお願いします」
「では……」

こほん、と慧音は一つ咳払いをして話し始めた。

今から大体、百年ちょっと程前でしょうか。その頃人里はまだ今ほど活気もなく、表面上妖怪の往来なんてありえない事でした。妖怪と人間は相容れないもの、というのが常識でしたからね。

そんな中で、私の近所にとある女性が住んでいました。大変美しい女性でしたがちょっと（当時の人間から見れば）変わりもので、よくふらりと里を出てうろうろと散歩をし、日が暮れる前程に帰ってくるのです。里の人間たちは、そんな変わった彼女を気味悪がって近づかないのでした。

そのある日の事です。いつものように日暮れ前には帰ってくるはずの彼女が、日が暮れても夜が明けても帰ってこないのです。身寄りのない彼女ではありましたが、流石に里は大騒ぎになりました。もし里の傍に人を食う妖怪がいれば、それは里にとって大変危険なことで

す。里の男衆が大勢武装して、いざ捜索に出ようとしたところで、彼女が戻ってきました。

「あれ、ちょっと待ってください」

白蓮が途中で遮った。首を傾げる慧音に、白蓮が続ける。

「霊夢さん、もとい、博麗の巫女は？」

「当時からいたのはいたのですが、場所が場所なので、本当に不味い時にしか相談に行かなかったんですよ。それに当時の巫女は、霊夢と違ってあまり里にも降りてきませんでしたからね」

続けますよ、と一言挟んで慧音は話を続ける。

もちろん里の者は何があった、どこに行っていた、と詰め寄ったのですが、その答えというのが、最初に言った『河童の所に行った』というものです。最初は誰もが面白がって聞きましたが、だんだんと話を聞こうとする人は減っていきました。というのも、当時の幻想郷でも河童は割と知られた妖怪で、彼女の話はその河童とは似ても似つかないものだったからなのです。

「慧音ごめんね、そっからは私が話す」
「妹紅？」
「いや、実を言うとさ、慧音が知ってる話と私が知ってる話、微妙に違うのよ」
「どういう、ことでしょうか？」
「まああれよ、ちょっとした後日談まで聞いただけ、だけどね」
茶をすすりながら、妹紅は軽い口調で続ける。

彼女曰く、幻想郷の人に近い河童ではなく、もっと人からかけ離れた、昔からある姿に似たものだったらしい。昔からある姿？　それはもう、緑色のぬるついた体に、亀みたいな甲羅を持った奴らさ。彼女は、玄武の沢のはずれの方にある穴に足を滑らせたらしい。その先にその河童達の住処があったそうだ。そこで彼女は、『特別保護住民』として大層にもてなされたらしい。その河童の中では、人間はとても尊重されるべき存在らしいとかなんとか。

「保護住民、ですか」
「そうらしいです。今までも何人か、人間が河童の国を訪れたことがあったそうですよ」
白蓮の問いに慧音が答える。ふむ、と白蓮は一声漏らすと、更に質問を投げかけてきた。
「その方たちは？」
「さあ？　ただ、ある男性は死ぬまで河童の国で暮らして、河童の国で一番の美人と結婚したとか」
「……その河童の美の基準とは？」
「さあ？　……続けるよ」
それで河童ってのは、当時の人間よりも遥かに良い暮らしをしていたらしい。ただどうもそれは、聞く限りあやふやでおかしなところばかりだったんだ。まあそこは省くとして、ね。一番聞き逃せなかったのはここ。『彼女はその河童との間に子を生した』らしいのよ。
「妖怪と人間の子？！」
「私も驚きましたが、彼女は何度も語ってくれました。私と妹紅以外の、里の者達は誰一人

信じませんでしたが……」
「続きがまだあるのよ。ひっくり返るほどの、ね」
「ちょっと待ってください」
妹紅が続きを語ろうとするのを、白蓮が不意に遮った。慧音と妹紅の視線が白蓮に向けられると、申し訳なさげに白蓮が問う。
「その、彼女の時間が気になって」
「時間？」
「里を離れて数時間で、子を生すほどその河童は成長が早いものなのかと」
ああ、と妹紅は手を打った。どうやら説明を忘れていたようで、慧音もしまった、と小声で溢す。
「ごめん、その話を忘れていた。どうもその河童の国は、こっちとは時間の流れが違うみたいなんだ」
「向こうで長い時間を過ごしても、こちらでは僅かな時間しか流れていないようです。その

辺も、里の者達が彼女の言う事を信じなくなった原因の一つですね」

妹紅の説明に慧音が補足すると、白蓮も納得したのか大きく頷いた。大丈夫と悟ったのか、また一呼吸おいて妹紅が続きを話し始める。

その河童の出生ってのはおかしなもので、腹の中にいる時に生まれたいか否か聞くらしい。それで子が是と言えば取り出し、否と言えば薬で殺してしまうそうよ。まあ、合の子だったせいか聞くまでもなく取り出されたわけだけど……その子はね、赤かったの。

「赤い？」

「ええ。髪も顔も赤い女の子よ。母親似だったからか、見た目には人間と大差なかったらしいわ」

「……それは母親似の一言で済まされるのですか？」

「じゃない？　彼女の曰く『目立って人に近い見た目をしていた』と言っていたから、もしかしたらそいつは幻想郷の河童なのかもね」

「何故その河童は自分と異なる河童の元にいたのでしょうか」

「さあね、私もそこまでは聞かなかったから。でも、彼女は子を産んですぐに、河童の里を出ようとしたそうね」

まだ幼い我が子と連れ立って、彼女は不思議な河童の国を抜け出したわ。最初は帰るつもりだったけど、彼女は一つ問題に気付いたの。……ええ、腕に抱えた子供よ。真っ赤なその子は、里に連れて行けば目立ちすぎる。考えながら右往左往していると、山の麓の小さな祠に辿り着いたらしいわ。

「山の祠？」

「見たことないかしらね。幻想郷では古株の神様の家よ」

「厄神様の祠です。人は厄を恐れてあまり近寄りませんから」

そう慧音に言われて、白蓮もああ、手を打った。人間好きらしいが、厄神という立場上あまり人里に降りてこない神様の話は、白蓮も何度か聞いたことがある。

「普通なら人間の前に姿を現さない厄神も、事の異常さを感じて姿を見せたらしいわね」

それで厄神は、その子供を引き取ったらしいわ。で、母親の方だけ里に戻ったわけ。人間

に危険が及ぶことを嫌がる厄神相手だから、信用していたみたいね。それからしばらく、彼女は人里で過ごしていたんだけど……亡くなる三年くらい前かしら。どうしても子供に会いたくなって、厄神のもとを訪ねたそうなのよ。

「そうだったのですか？」

「うん。もうみんな興味なくしてたから聞いてないだろうけど、私は度々見舞いに行ってたから」

「ではここからは、妹紅の話だけですね」

「もうほとんど話す事無いからあんまり期待しないでね」

まあ、結果から言えば会えなかったらしいわ。何でも厄神一人では手に余って、河童の元に預けたそうなのよ。流石に妖怪の所に乗り込むわけにもいかず、諦めたらしいんだけど……これで完全に廃人になっちゃってね。亡くなるまでずっと、ぽつぽつ妙な事を言ってたわ。

「……これでおしまい」

「え、それだけなんですか？」
「言ったじゃない、もうほとんどないって。それ以降は慧音も知ってる通り、里外れで静かに亡くなったのよ」
「……まあ、妹紅の言う通りです。我々も知っているのはここまでですね」
「そうですか……ありがとうございます」
「いえいえ、ご期待に副える話を出来ず申し訳ない」
「お気になさらず……もう遅いですが、里まで送りましょうか？」
「大丈夫よ。私も慧音も、妖怪にやられるほどヤワじゃないから」
　妹紅は手に炎を灯しながら、白蓮に笑顔で言う。それに時間は遅いが日はまだある。白蓮も問題なしと判断したのか、二人を門前で見送った。途中で慧音と別れ、妹紅は竹林の我が家へと一人で向かう。もう竹林が見えてくるところで、人影が見えた。この時間里の外をうろつく者はいない。妖怪か、と手で炎を燃やすと、ゆっくりと近づいていく。灯りに映った顔は

「どうも、竹林の蓬莱人さん」
「あんた、厄神の」
山の厄神、鍵山雛だった。

二　鍵山雛の告発

「まあ、座りなよ。お茶くらい出すから」
「お構いなく」
里で一般的な住居となんら変わりない自宅に、妹紅は雛を招き入れた。彼女曰く妹紅に『話したいことがある』とのこと。特に妹紅は思い当たる節は無かったが、無視するのも心持ちが悪かったので、とりあえず腰を落ち着けるよう自宅へ戻ったのだ。

茶を出して腰を落とし、囲炉裏に炭をくべる。一息ついたところで、妹紅は雛に問うた。
「で、話って？」
「今日、『あの子』についてお話されていたようなので」
「……どこで聞いてたんだ」
「厄の気配がしたから、里近くまで下りてきたのよ。あ、里には入ってないから安心して」
「そこは心配してないさ。で？」
「貴女には、その後を伝えておこうと思って」
「その後……ああ、例の子の？」
静かに頷くと、雛はぽつぽつと語り始める。
実を言うとね、彼女が来る前に、父親の方が私の所に来たの。妻がいなくなってしまった、知らないかって。私は事情を知らなかったから、奥さんは人里に帰りました、娘さんを預かってますよ、って返したわ。そうしたら彼、娘を預かりたいって申し出たのよ。そのままその父親に私は子供を預けたわ。子供も親の元の方が居心地がいいだろうと思って。でも、そ

のしばらく後に彼女が来て、私酷く後悔したわ。

彼ね、とても意地の悪い河童だったそうなのよ。彼女はそいつから逃げるために、こちらへ戻ってきたらしいわ。それを知らないまま私は預けちゃって、後からそれを聞いてもう自己嫌悪よ。

「それで、その子は？」

「……又聞きだから、あんまり本気にしないでね」

身を乗り出しながら、妹紅は真剣に雛に問う。雛は重い顔をしながら、そう前置きして静かに告げた。

彼はその子を五歳まで育てて、それからすぐに捨てたそうよ。育てると言っても、甲斐甲斐しく世話を焼いたわけじゃないわ。適当にご飯食べさせて死なない程度にしておいて、自分で何とかなるようになったらすぐにポイよ。幸か不幸かその子は直後、沢にあるとある河童の家に拾われたんだけどね。捨てたはずの子がすぐ傍にいた時の、あの河童が百面相する様は見てみたかったわ。

最初は誰もその子を気にしなかったけど、ある日年老いた河童が言ったのよ。『この子は合いの子だ。ここにいれば我々に災厄を呼ぶ。出ていけ！』って。勿論誰もが驚いたし、誰もがその河童達の家族に詰め寄ったわ。勿論、その河童達は何も知らないわけ。話が進まないから本人に聞いたのよ。お前の親は誰だ、ここにどっちかいるのかって。その父親がね……。

「何か問題があったのか？」

「彼、彼女――相の子を拾ってくれた河童の夫だったのよ」

「……は？」

「分かりやすく言うと、二股してたわけ」

其の瞬間妹紅は思わず、背中から炎を噴き出していた。慌てて噴き出た炎を収めるも、妹紅の怒りは収まらない。

「そいつそこまで屑だったのか？」

「ええ。信頼できる筋からの情報だから、間違いないわね」

怒りも一周回って呆れ果てた妹紅に、雛は尚も続ける。

二股がバレたそいつに奥さん激怒、他の河童達共々袋叩きにされて、結局そいつは八つ裂きにされちゃったのよ。

で、問題は残された子ね。すぐに彼女は河童の沢を出て、外れの洞窟で細々と暮らしていたわ。私が再会したのはその頃ね……これは後から知った事だけど、当時の河童達は彼女に対して、意見が真っ二つに割れていたらしいわ。経緯はどうあれ相の子である彼女を排除すべきという過激派と、不幸の結果生まれたから排除するほどではないという穏健派にね。

それで、彼女が沢を出たすぐ後だったかしら。玄武の沢が酷く荒らされたらしいわ。結局は妖精のいたずらだったみたいだけど、過激派の河童達はその子の仕業としたの。自分達への怨恨を理由として、彼女の住んでいた洞窟に火を放ったわ。その子の住処が燃やされる中で、私は彼女を地底に送ったの。知り合いの妖怪に頼んで、他の妖怪に干渉されづらい場所も空けて貰ってね。それでその子と私の縁はお終い。

そう締めくくって、雛は静かに目を伏せる。

「……今考えると、私が預かるなんて真似をしたから、あの子に沢山厄を預けちゃったのよね」
「あんたは、悪くないよ。むしろ礼を言いたいくらいさ」
気にするな、と妹紅は付け足して柔らかく微笑む。雛もつられて少し笑うと、ゆっくり立ち上がった。
「帰るのか？」
「あまり里の近くにいすぎるとね。色々とありがとう」
一礼して雛は妹紅の家を出て行った。静かに竹林を後にする雛を、妹紅はぼんやりと見送って家に戻った。

三　河童の子の独白

一番古い記憶は、沢山の誰かに囲まれている景色だ。誰かが声を張り上げる。誰もが声を張り上げる。やがて石を投げつけられ、痛みを背にしながらその場から走り出した。私は走りながら泣いていた。泣きながら「帰りたい」と溢し続けた。どこに？ 私はどこに帰ればいい？ どこなら、私を受け入れてくれるだろうか。あの、記憶にすらない生まれた不思議な国に変えればいいのだろうか。もうわけがわからぬまま、走って走って走り続け、外れたところの洞窟に蹲った。

そうだ、あいつらはああいう奴なのだ。あいつらは悪党だ。莫迦で嫉妬深い猥褻な、図々しく自惚れ切って残酷で虫のいい動物なのだ。あいつらと同じ血が半分も流れているなんて、あまりに汚らわしくて吐き気がする。しばらく狂ったように私は笑って、疲れ果てて倒れ込んだ。どれくらい、その洞窟にいただろうか。時折昔育ててくれた、親代わりの女性が食事を持ってきてくれた。彼女の訪問だけが私の生活であり、楽しみであり、変化だった。あいつらへの恨みは消えなかったが、彼女と過ごす時間は楽しいものだった。

それからしばらく、誰かが私を見ているようになった。それは監視ではない、興味や気後れから来る視線だ。最初は嫌な気持ちがした。しかしあまりにずっと見ているし、辛そうなので、だんだんと気になってきた。明日は話しかけてみよう。そう願った明日は、私には来なかった。

私は、またあいつらに追いやられた。やってもいない罪を押し被せられ、我が家を砕かれた。その時私は、親代わりの彼女に手を引かれたのだ。きっと一緒に暮らせる。その私の僅かな期待すら、粉々にされた。

彼女は私を地底に落とした。彼女なりに世話を焼いてくれたのだろうが、幼い私にはわからなかった。どうして一緒に暮らせないのか、泣きわめきながら私は地底に落ちて行った。

そして、地底で一悶着の後私はここにいる。築かれた壁を睨みながら、私は今も恨んでいる。

なぜ私を生んだのか、どうして私がこんな目に遭わなければいけなかったのか。誰もが私に不幸を押し付けて、今ものうのうと地上で暮らしている。ああ、私はあの明日が欲しかっ

ただけなのだ。私を見ていたあの子と話して、いつも通り彼女とご飯を食べる、何のこともない平凡な明日が欲しかっただけなのだ。一人でだって構わない。私は、ただただ普通に生きたかっただけなのだ。叶わぬその願いもとうに色褪せて、私は今日も壁の中にいる。

《了》

高坂流　無意識

「オ姉チャン、オ姉チャン、今夜ハオ客様ガオ泊マリニナルカラ、寝床ノ支度ヲシテオイテネ」

まるでオウムが鳴くようにも聞こえる声。誰の声なのかは分かっていた。目の前の椅子に座っているのは古明地こいしだ。まるで、男のようにも女のようにも聞こえる声だった。青年はその前で居心地悪そうに身動ぎし、落ち着かないと言うように目を瞬かせた。

「さて、あなたは無意識を知りたいって言ったっけ。随分と時間がかかるから、先にお姉ちゃんに話をしておいたよ」

「ええ。無意識を知りたい。そのために私は、あなたのことを紹介されたのだ」

「ふーん、へー、ふーん？　なるほどねぇ、なるほどねぇ！」

帽子を被ったままの彼女が、青年の前でぴょこぴょこしゃがんだり立ち上がったりしながら多方面から覗き回る。青い閉じられた第三の瞳が青年の方に向けられる。

「私を認識できるあなたが無意識を知ろうとするのはなんだかおっかしいね！　お姉ちゃんなんて、私を認識することすらできやしないのに」

「意識しないように無意識で話をしていますし、あなたの声は聞こえても見えるのかというと分かりませんから。だからそう尋ねたのです」

「ふぅん、へぇ、ふぅん！」

古明地こいしがぴょこぴょこと彼の周囲を歩き回り、分からない、分からない、と言うように首を傾げて飛び回る。青年はそれに意を介する様子もない。いや――認識はしていないが、無意識に理解しているのだろう。

「うんうん、よっし！　分かった！　でもでも、無意識を識るってことは大変なことだし、欲は捨ててないと駄目なんだよねぇ、分かる？　分かるかなぁ、本当に欲を捨てられるかなぁ？」

ぽん、ぽん、と青年の肩が叩かれる。ようやくここで青年は古明地こいしの存在を認識した。無意識を識った相手を認識したのだ。彼が憧れる力を持つ相手を。

「捨てられる。ああ、捨てられるとも」

青年はそう繰り返すように口にする。現在、他に何か抱く欲や意図はない。考えてもみれ

ば、そう言ったことは無縁に生きている。

神妙な目つきで古明地こいしは青年の目を見つめた。そして、うんうん、と何かに頷いたかのように腕を組み、ぽん、と青年の両肩に手を置いた。

「それなら教えてあげられるよ、うん、準備は良いかな。目を閉じて――」

古明地こいしが目を閉じ、青年も瞳を閉じる。そして青年は、無意識を識った。

青年がそれから人里に帰って一ヶ月経った。青年が無意識を知ったからと言って、何かが変わる訳でもなかった。さもありなん、青年の無意識は言葉では表現もできるものでもなければ、そもそも認識してしまっては理解ができるものでもなかったからだ。

ただ、彼が何も考えずに何かを行えば大体上手くいった。いや、上手くいくようになった。無意識に他者の無意識下に接触し、それが表出することは決して彼にとって望ましからざる

ことではなかった。

しかし、である。彼はあくまで自分自身に利益を用いることを拒否した。金銭のためでもない。自らの栄光心のために求めるでもない。それが良いことのためだと確信して行っているために、彼にとっては全く利益とはなり得ない。けれど、それで良かった。

彼は聖人でもなく、商人でもなく、只の農夫であった。猫の額ほどの広さの土地から収穫を得て、幾ばくかの家畜を飼い、糊口を凌いできた。妻も居らず、それだけではなく家族も居ない。ただ目の前のことのために生きて、終いに死んでいくそれだけの命だった。

それでも、他の誰かと少なからず関わることはある。取引を行うことも珍しくはないし、そもそも彼もまた余った農作物を家畜に食わせるだけですべて足りているわけでもなかった。

「あんた、軽く打ってかないか」

今日もそう、里の店で余った作物を売り払ったところで青年は声をかけられた。顔に皺が深くできている四十半ばの男である。中年の男の声に、青年は小さく首を横に振った。

「私は博打は打たないんだ。そもそもそれだけの余裕もない」

「いいじゃねぇかいいじゃねぇか、明日は大祭なんだから」
大祭は博麓神社で行われる祭りではない、里内の家々を挙げた「人里の」祭りである。丁度時期は彼岸。今宵ばかりはどんちゃん騒ぎで幾ら騒いでも誰にも咎められない。
「だいたい、今売った野菜のカネもあるんだろう」
「それは……」
少ない元手だし、別に他の何かに使うアテがあるわけではない。仮に負けたとしても、せいぜいが身ぐるみ剥がれる程度だろうか。その程度の賭けに参加したとしても、さしたる問題ではない。
だが、欲を捨てると宣言したからには、それに則った形でなければならない。だからこそ、あくまで参加を渋っているのだ。博打は人の欲が渦巻く魔屈だ。
「まあ、その程度を賭けられもしない腰抜けだって言うんじゃ仕方ねぇなあ、おい」
男が後ろを向いてそう笑うと、どっとその後ろから笑い声が聞こえてきた。青年を嘲笑う声だった。男が背を向ける。もう話を聞くことはない、とでも言うように。最後に青年の方

を振り返り、男がこう口にした。
「あばよ、腰抜け」
「分かった、分かった。……そこまで言われたからには仕方ない、参加させて貰うよ」

別に参加したい訳でもない丁半の博打に巻き込まれ、青年も落ち着かない様子で周囲を見回していた。面倒な状況なのは変わらないが、それでも賭けのタイミングを見計らい、決して負けず決して勝たない程度に賭けを続けていた。
腰抜けなら腰抜けらしく、些細な金額で賭けをする。取れればそれでよし、取れなければそれでも良し。手堅い戦術とも言えるだろうが、欲を出さない勝ち方ではある。
尤も、賭けの場において欲を出すも出さないも本来は無いはずだ。けれど、彼の脳裏には古明地こいしとの約束めいた言葉が焼き付いている。曰く、欲を捨てなければならないと。無意識を知りたかったがために、欲を捨てる。一見矛盾しているようにも見えるそれ。けれ

ど、実際に知った無意識とは大それたことではなく、意識の埒外にあることそのものである。

ツボ振りも、中盆も基本的には同じような無意識を共有している。結局、賭けの場合は貸元が勝たなければ仕方がない。最終的に慣れない輩は身包み剥がれて追い出される。

「おい、旦那。全く負けてねぇじゃねぇか、ん？」

青年の肩にがっしりとした手が掛けられた。刀傷を負った男が剣呑な目つきで睨みつけてくる。青年をここに来るように誘導した男がその後ろについていた。舎弟か何かなのだろう。とすれば、この男はもしかしたら賭場の貸元かもしれない。

「偶然だろう。私はたまたま来ただけで、たまたま勝っても負けてもいない、そういうものさ」

「スカしたことを抜かすねェ、おい」

かか、と男が笑う。目の奥が全く笑っていないことから好印象を持たれていないことは確実だ。だが、わざわざ声をかけられるほどに派手な動きをしていたかというとそうではないはずだ。

「私も負けてスって今日の売り上げを無くしたくはないからね」
「そういうことじゃねぇんだよ、分からないかねェ」
どうも因縁の付け方が面倒くさいことになりそうだ。青年はそう直感する。まるで蛇のような目つきで男が睨んでくることが不快に感じられた。
「アンタは本気で負けようとも思ってないし、勝とうとも思ってない、他の連中のぎらぎらした目つきが全く見られねぇ。かと言ってさほどカネを持っているようにも見えねぇんだ」
「それは――」
欲を持たないように、己をそう律した結果である。過ぎたるはなお及ばざるが如しであり、己一人が食っていくだけならさほどの問題もない。蛇のような男の目線の奥には、苛立ちと嫌悪のようなものが感じられる。ともすれば、男は青年を切り捨てることすら躊躇わないかもしれない。無造作に差された腰の刀が、そう言ったならず者であることを客観的に示している。
「私は賭けに命を賭けようとまでは思っていないからね」

「それじゃあ成り立たねぇんだよなぁ、おい！」

ぎろりと男が青年の瞳を見つめた。憤怒、嫌悪、憎悪――無数の感情がその奥には滲んでいる。そして、その裏にある得体の知れないものを見た、という嫌悪と恐怖までが見てとれる。きっと、男自身ですら自覚していない意識の果て――無意識の代物だ。

「それなら、やるしかないね」

一日分のなけなしの売り上げをここで何もせずに巻き上げられれば、どのみちまた里を訪れた時にもたかられるようになって飢え死にする。しかし、それを防ぐためならば――結局のところ、相手に言い聞かせられるだけの結果を見せつけてやるしかない。

欲ではない。これは欲ではない。そう青年は言い聞かせ、目を閉じてコマ札を置く。この賭けに対する賭けと姿勢を決め、青年はもう一度目を見開いた。

――そこから先の勝負はあっけなく付いた。ツボ振りの声も、中盆の声もずっと前から震えっぱなし震えている。サイを入れることすら躊躇われるようなほどだ。

それでも、賭けを続けなければならない状態に置かれることが貸元側の悲しいところである。蛇のような男が殺意を込めた様子で青年を睨み続けているが、青年からすればそれも構うものではなかった。

笊にサイが入れられ、振られる。今回は丁の方に賭けている。手元のコマ札一式をすべてそちら側においているのだから、ほぼ他の客は全部半側に賭けているような有様だ。

顔を蒼くしているのはツボ振りである。このような状態では商売上がったり――というよりも、その出目についてはツボ振りがほぼコントロールしきれる形でやっているからこそ賭けが成立するようなものだ。だが。

「ピンゾロの丁」

「そんなわけがねぇだろ！　イチニの半だ！」

ツボ振りが怒鳴り声を上げ、笊を開く。天を向いているのは一の出目が二つ。ピンゾロの

丁。

「ありえねぇ、ありえねぇっ！」

「テメェ何かしやがったな！」

怒号を上げ、青年の首元に刀が突きつけられる。青年はそれに意識を傾ける様子もなく、ツボ振りへと目線を向ける。中盆とともに竦み上がっているツボ振りが、サイを手に取り、笊を掲げ――その腕と首が吹っ飛んだ。同時に血の海が広がる。刀を抜き払ったのは、貸元の蛇のような目つきの男だった。途端、悲鳴が広がってばたばたと逃げ出す男たちの姿。

「要済みだよテメェは。俺が振る。全部賭けな、アンタ」

「じゃあ、そちらは何を賭ける」

「家に畑、ついでにこの貸元役そのものだ、こうなっちまったらテメェが死ぬか、俺が死ぬかの二択しかねぇんだよ！」

青年は涼しげな様子で貸元の男を見つめる。氷のような目線で射抜き返し、青年は小さく鼻を鳴らす。賭けに対しては、賭けで対峙しなければ本来意味はない。

そもそも、このコマ札もただそれだけで金になるものではない。実際、この札を換金してようやく金銭にはなるが、このままただ換金してくれるという想像もできそうにはない。

「私は単純に、自分の身の安全と自分の最初に賭けてる金が戻れば何も求めないだけだよ」

「信じられるかそんなもの。行くぜ――」

笊にサイが投じられる。憤怒に任せている男の様子を見ながら、涼しげな様子で青年は頷き、笊が止まったところで青年はこう口にする。

「サブロクの半」

「馬鹿な、ロクゾロの丁で回したんだぞ」

「それは知らないよ、サブロクの半だ。持ち札全部」

貸元が唖然としたまま、笊を掴んでいた手を離した。その手が震えている。中にあるサイの目は、本来絶対に誰もが知ることができないものだ。出目を振って調整できる貸元やツボ振りならまだしもである。

そして、ツボ振りは一つ前でしくじっている。だから首が飛んだ。けれど、貸元になって

からはそれはないだろう。少なくともロクゾロの丁で出そうとしたのならば間違いなくそうなるはずだ。本来ならば。

だが、青年は首を横に振る。サブロクの半、一つのサイは必ず六であることは変わらない。だが、もう一つは三と賭けた。意識していないところから、無意識の果てに至って感じ取った結論だ。

錯誤？　慮外の意識？　それとも不意？　――いや、それをすべてひっくるめての「無意識」だ。青年は無意識を識っている。ならば、その結論に従って、一つの目を三に賭ける他ない。

「テメェ……」

「開けるんだろう」

ぎり、と歯を噛んだ貸元が、勢いに任せたかのように笊を開く。一つ目の出目は六、――一瞬喜色が見えた。もう一つは三――憤怒、憎悪、無数の慮外のそれが青年へと向けられる。

「死にやがれっ！」

貸元が刀を抜き、青年の方へと向かって走り出す。そこから抜けられるはずもない。だから、青年は目を閉じた。肉の引き裂かれる音。悲鳴、絶叫、断末魔の喘鳴、無数の混沌とした音色が青年を包み、そして引き裂いた。

惨劇が止んだ。首が、手が、肉が飛び散って賭場を血の海に沈めている。まるで悪夢のような光景ながら、青年は特段の感情を覚えることもなく周囲を見回した。壁にぶちまけられた夥しい血の量が、ここに生きている人間はいないと認識させてくれる。

このような光景、望んでなどいなかった／本当にそう？

別に自分は、今日の売り上げ程度を回収できれば良かった／本当にそう？

人に死なれる光景をわざわざ考えたくもなかった／本当にそう？

自分は平穏無事な人生を過ごしたかっただけなのだ／本当にそう？

最初に切り飛ばされて死んだツボ振りの男の首が青年の傍らに転がっていた。何か言いた

げなその首を掲げると、死んだはずの男の口元が動く。まるで鳥がさえずるような煩わしい声だった。

「オ姉チャン、オ姉チャン、オ客サマハオ帰リニナルソウダカラ、布団ノ準備ハシナクテモイイヨ。ディナーノ準備ヲシテオイテネ」

ぱあん、と手が叩く音が響き、青年の意識が覚醒した。いや、覚醒させられた。そうだ。そもそも今までのことはすべて無意識の中の出来事——つまりは、夢のまた夢。目の前には、古明地こいしが座っている。

「……今までのことは」

「そうだよ、あなたの夢／無意識。あなたが認識すらしていなかった、あなた自身の欲望」

——無意識の欲望。無意識の願望。そして、無意識の悪意。彼を支配していたものは、彼自身も知らなかった欲望や悪意。

決して本来知らなかった。いや、知るべきではなかったそれ。彼は、それを知ってしまった。いや、知らされてしまった。望む望まざるに拘わらず、彼はそれを目の当たりにさせられてしまったのだ。

「つまり、あなたはそれを捨てきったつもりになっても捨てられていなかったってことだよね、うんうん」

「まさか――」

「あなたがそうなることは最初から分かっていたよ、どうしたいか、は分かっていたけれど、どうなるか、は聞かれていなかったもんねぇ」

言わなかったから、聞かれなかったから黙っていた。それが人間には不可能なことであることを知って黙っていた。そもそも知的生命体である以上、彼女の策には必ず陥る。それから抜け出したように見えて、実際には全く抜けることができていなかった。

釈迦如来の掌の内の悟空。それが単純に古明地こいしに変わっただけだ。結局、彼女の掌の内から逃れ出ることはできなかった。

「うんうん、良きかな良きかな。久しぶりにディナーをゆっくり楽しめそう。心も身体も、どっちも美味しそうだからね。楽しませてね？」

ふと、椅子に座ったままの古明地こいしの姿がかき消えた。青年が気配を背中に感じ、反射的に振り返れば額と額がぶつかりそうなところで古明地こいしの何も見ない瞳が彼を見つめていた。

どこまでも嬉しそうに。

どこまでも恐ろしく。

彼は、彼女が人でないことを自覚した。

無意識を御すことなど不可能なのだと、理解した。

「は――」

青年の口元が笑みの形に歪む。それが、青年が最後に認識した自分自身の姿だった。目の前が、古明地こいし（無意識）で塗り潰されていく。

そしてその場には、彼女以外誰も居なくなった。

「――さ、次はあなた？」

彼女は虚空に向かって問いかける。いや、彼女はこちらに向かって問いかける。彼女は識っている。意識が無意識に足を踏み入れたことを。認識するはずのない、彼女を認識してしまったのならばそれは当然の帰決なのだから――。

そして、彼女はあなたに問い掛ける。

「あなたは、無意識を知りたいんだっけ」

《了》

近藤貴弥　或阿呆の一生

私はこの文書を公表する可否は勿論のこと、公表する時も貴方に一任したいと思っています。

貴方はこの文書の中に出て来る大抵の人物を知っているでしょう。しかし私は発表するとしても、索引をつけずに貰いたいと思っています。

私は今最も不幸な幸福の中に暮らしています。しかし不思議にも後悔してません。唯私の如き友人を持ったものたちを如何にも気の毒に感じています。ではさようなら。私はこの原稿の中では少とも意識的には自己弁護をしなかったつもりです。

最後に私はこの文書を特に貴方に託するのは貴方の恐らくは誰よりも私のことを知っていると思うからです。どうかこの原稿の中に私の阿呆さ加減に笑ってください。

稗田阿求

藤原妹紅

一　時　代

それは或屋敷の書斎だった。二十歳になったばかりの彼女は、課せられた役目を果たすべく、見聞した情報を思い出す。

そのうちに日の暮れは迫り出した。しかし彼女は熱心に記憶を掘り起こしていた。そこに並んでいるのは記憶や情報というよりも、彼女自身だった。阿礼、阿一、阿彌、阿未、阿余、阿悟、……。

彼女は薄暗がりと戦いながら、自らのことを思い出そうとする。が、記憶は自ずからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼女はとうとう根気も尽き、書斎を出ようとした。すると障子の向こうに、彼女が役目を終えるのを待つかのように伸びている影が一つ、彼女を迎えた。彼女は書斎の中で佇んだまま、影を見上げる。彼女は妙に大きかった。のみならず如何にも

庇護的だった。

「彼女の人生は……」

彼女は暫く書斎の中からをこういう彼女を見渡していた。……

二　母

その人達は皆同じように鼠色の着物を着せられていた。広い部屋はそのために一層憂鬱に見えるらしかった。彼らの一人は熱心に経をあげ続けた。

彼女は血色の善い女と一緒にこういう風景を眺めていた。彼女の母も五年前には少しも彼らと変わらなかった。少しも——彼女は実際彼らの生活に彼女の母の生活を感じた。

「行きましょうか」

女は彼女の先に立ちながら、部屋を出て、その里の中で最も大きな屋敷に彼女を案内した。その屋敷の一室には、随分と前から使われている紫檀の文机があった。彼女はその文机の上

に微かに墨が残っているのを発見した。それは丁度何かを書こうとして書けなかったものだった。彼女は女と立ち話をしながら、もう一度彼女の母のことを思い出した。

あの人は本当に彼女にとって母であったのかもしれない。しかし、彼女は、女に母のような感情を懐こうとしていた。

「この部屋は皆使っていた部屋なのよ」

彼女は痛む頭から逃れるように、障子の外を眺めていた。そこには幾つもの草や花が生い茂っている庭が広がっているだけだった。微かに人工の気配を感じさせる庭だった。

彼女の激しくなる頭痛に堪えるように顔を顰める。彼女の頭にはいつしか彼女の母の姿は面影となり、静かな部屋の底に沈み落ちていた。

三　家

彼女はある屋敷の一室に寝起きしていた。

それは里の遠い所に建てられたがゆえに静かな一室だった。

彼女の友はこの一室に度々彼女と言い合いになった。それは女や彼女の下女の仲裁を受けることもないことはなかった。しかし彼女は彼女の友に誰よりも愛を感じていた。一生独身だった彼女の友はもう彼女が十五の時には、まだ十五でありながら、六十に近い年よりだった。

彼女はある屋敷の一室に何度も愛し合うものは苦しめ合うのかを考えたりした。その間も何か気味の悪い静かさを感じながら。

四　我（が）

彼女は彼女の友と一緒にある茶屋の卓に向かい、絶えず微笑を浮かべていた。彼女は余り口をきかなかった。が、彼女の友の言葉には熱心に耳を傾けていた。

「今日はあなたに会いに来たのよ」
「私に？」
彼女の友は頬杖をしたまま、極めて無造作に返事をした。
「やることがあるでしょう？」
その言葉は彼女の知らない世界へ――限りなく人間に近い「我」の世界へ彼女自身を解放した。彼女は何か痛みを感じた。が、同時にまた歓びを感じた。

五　病

彼女は絶え間ない涼風の中に長い書物をひろげ、指先に言葉を探していた。
博麗の巫女　博麗神社の巫女。

御阿礼の子　自らであり、自らではない他人。

藤原妹紅　竹林で起居する少女。友。

彼女の想像ははっきりと彼女の友を描き出した。すると彼女は頭に今までに知らない痛みを感じ、思わず書物を閉じた。痛みを？　しかしそれは痛みではなかった。彼女は短い命を思い、もう一度彼女の友を想像した。数百年前にもこの屋敷に訪れる彼女の友のことを。

六　火花

彼女は突然の雨に濡れたまま、土の上を踏んで行った。雨はかなり烈しかった。彼女は飛沫の満ちた中に竹の匂いを感じた。

すると目の前で火の粉が一つ、赤い色を発していた。彼女は妙に感動した。彼女は胸に彼女の友への思いを隠していた。彼女は雨の中を歩きながら、もう一度火の粉を見上げた。

火の粉は彼女が迷わないように相変わらず赤い色を放っている。彼女は人生を見渡しても、

何も特にほしいものはなかった。が、この赤い火の粉だけは、――凄まじい雨の中で赤い色を放つ火の粉だけはつかまえたかった。

七　結婚

彼女は時々、結婚について考えるようになった。彼女が暮らす里の内では、彼女の結婚について話されることがあった。しかし、彼女は結婚をする気にならなかった。彼女は彼女の友から貰った黄水仙に鋏を入れながらこう考えていた。結婚というものに、幸福を見いだせなかったから。……

八　彼女等

彼女と彼女の友は平和に生活した。大きい欅の葉の広がった影に。——彼女の家は里の大路から最も離れたところにあったから。

九　蝶

梅の匂が満ちた風の中に蝶が一羽ひらめていた。彼女はほんの一瞬間、乾いた彼女の唇の上へこの蝶の翅(つばさ)の触れるのを感じた。が、彼女の唇の上へいつか捺って行った翅の粉だけは彼女が病に伏せてもまだきらめていた。

十　月

彼女は里の通りで偶然彼女の友と遭遇した。彼女の友の顔はこう云う昼にも月の光りの中にいるようだった。彼女は彼女の友を見送りながら、（彼女等は一面識もない間がらだった）

今まで知らなかった寂しさを感じた。……

十一　枷

彼女と彼女の友は一つの家に住むことになった。それは彼女の役目が終わったためだった。役目を終えた彼女はまた新しい役目を課せられ、一枚の文書を書くことになった。彼女はその文書の中に、彼女の友にこの文書を見せないでほしいという一文を加えた。彼女の一生が、彼女の友の枷にならないことを願うために。

十二　彼女

或広場の前は暮れかかっていた。彼女はやや熱のある体でこの広場を歩いて行った。彼女の後ろには、彼女の友が物珍しそう周りを見ながら歩いて来る。

彼女は立ち止まり、彼女の友を待つことにした。それは彼女等にとって始めてだった。

彼女は彼女の友と一緒にいる為には何を捨てても善い気持だった。

彼女は彼女の友の顔を見つめ、「あなたは後悔しませんか?」と言った。彼女の友はきっぱり「後悔しないわ」と答えた。彼女は彼女の友の手を抑え、「私も後悔しません」と言った。彼女の友はこう云う時にも月の光りの中にいるようだった。

十三　出産

彼女は襖側(ふすまぎわ)に佇んだまま、白い手術着を着た産婆が一人、赤子を洗うのを見下ろしていた。赤子は彼女の子ではなかった。しかし、彼女自身になる可能性はあった。彼女自身がそうであったように。

赤子は石鹸の目にしみる度にいじらしい顰め顔を繰り返した。のみならず高い声に啼きつづけた。彼女はしみじみこう思わずにはいられなかった。――

「何の為にこの子は生れて来たのでしょうか？　――何の為に又この子は次代の御阿礼の子としての運命を荷ったのだろう？」

十四　雨

彼女は広い布団の中で彼女の友といろいろの話をしていた。寝室の窓の外は雨ふりだった。彼女の友の顔は相変わらず月の光りの中にいるようだった。が、彼女の友と話していることは彼女には退屈でないこともなかった。彼女は腹這いになったまま、彼女の友と一緒に日を暮らすのも七年になっていることを思い出した。

「私はこの人を愛しているのでしょうか？」

彼女は彼女自身にこう質問した。この答は彼女自身を見守り続けた彼女にも意外だった。

「私は未だに愛しています」

十五　喧嘩

彼女は彼女の友と取り組み合いの喧嘩をした。彼女の友は彼女のために傷つきやすいに違いなかった。同時に又彼女も彼女の友の為に自由を失っているのに違いなかった。

彼女等は取り組み合ったまま、とうとう縁先へ転げて行った。縁先の庭には百日紅が一本、雨を持った空の下に赤光りに花を盛り上げていた。

十六　病気

彼女は不眠症に襲われ出した。のみならず体力も衰えはじめた。何人かの医者は彼女の病にそれぞれ二三の診断を下した。――胃アトニー、神経衰弱、脳疲労、……

しかし彼女は彼女自身の病源を承知していた。それは彼女の身に必ずや訪れる病であっ

た。彼女が阿礼であり、阿一であるがゆえに！

十七　夜

夜はもう一度迫り出した。彼女は眠ることなく、障子の向こうで烈しくなる雨音に耳を傾けていた。隣では彼女の友が背を向けている。それは彼女には歓びだった。が、同時に又苦しみだった。彼女の友はいつしか体を起こし、いつしか彼女の横に腰を据えている。

彼女は無言のまま、涙を堪えている。

十八　死

彼女はひとり寝ているのを幸い、柱に帯をかけて縊死しようとした。が、帯に頸を入れて見ると、俄に死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみの為に恐れたのではなかった。

彼女は二度目には懐中時計を持ち、試みに縊死を測ることにした。するとちょっと苦しかった後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさえすれば、死に入ってしまうのに違いなかった。彼女は時計の針を検べ、彼女の苦しみを感じたのは一分二十秒かだったのを発見した。障子の外はまっ暗だった。しかしその暗(やみ)の中に、彼女の友の顔があるのを感じた。

十九　嘘

彼女は段々と衰えていった。しかし、彼女の友はまだ子どものようでありながら、年寄りのようでもあった。彼女の友は彼女の記憶の最も古いところにいる彼女の友と何一つ変わらなかった。

彼女は彼女の友にある感情を懐いていることを見出した。それは愛しているという感情とは正反対のような感情だった。しかし、彼女は彼女の友にその感情のことは言わなかった。

彼女は彼女自身の身体が痩せ細っていくのを受け入れたから。それでも、彼女の友から寄せられるある感情には微笑を浮かべるのすら辛くなっていた。

二十　火あそび

彼女の友は輝かしい顔をしていた。それは丁度朝日の光が薄氷にさしているようだった。彼女は彼女の友に好意を持っていた。しかし友情は感じていなかった。のみならず彼女の友の体には指一本触れずにいたのだった。

「本当にいいの？」

「いけませんか？」

「いけないというわけでは……」

彼女等はこういう問答から一緒に死ぬことを約束した。

彼女は彼女自身が落ち着いているのを不思議に思わずにはいられなかった。

二十一　それから

彼女は彼女の友と死ななかった。唯未だに彼女の友の体に指一つ触っていないことは彼女には何か満足だった。彼女の友は何事もなかったように彼女と話したりした。のみならず彼女に彼女の友が持っていた毒薬を一つ渡し、「私が持っていても意味がないから」と言ったりした。

それは実際彼女の友が持っていても意味のない薬だった。彼女は一人縁側に座り、白百合を眺めながら、度々死の彼女に与える平和を考えずにはいられなかった。

二十二　敗北

彼女は筆の持つ手も震え出した。のみならず涎さえ流れ出した。彼女の頭は、彼女の友か

ら貰った薬を用いて、半時間程度目覚めた後の外には一度もはっきりとしたことはなかった。彼女は唯薄暗い中に、彼女の友のことを思っていた。真っ先に走ってくる彼女の友のことを。

《了》

後書き

この度は、芥川龍之介没後九十年記念合同誌「東方芥川龍之介合同」をお買い上げいただき、誠にありがとうございます。表紙絵を描いてくださった、たかはる氏にもお礼申し上げます。本合同では芥川龍之介が発表した小説を下地に主催含めて九名の作家が筆を執っていただきました。この場で重ねてお礼申し上げます。

参加者の皆様の中には大変苦労された方もおられますと思われますが、苦労された方は皆口を揃えて、こう仰っておりました。これ、芥川龍之介っぽいのかなぁ……と。

羅生門、鼻、地獄変、六の宮の姫君、杜子春、魔術、アグニの神、奉教人の死、邪宗門、路上、舞踏会、開化の良人、一塊の土、河童、保吉もの、河童、将軍、蜃気楼、或阿呆の一生、歯車――いずれも芥川龍之介の作品ですが、そのいずれもが巧みな文章で彩られ、構成

された作品となっております。王朝ものを書くために原典を読み込んだ芥川龍之介、現代ものを書くために女の言葉遣いについて考えた芥川龍之介、書けないようになっても書こうと自らに題材を寄せた芥川龍之介。

ここに掲載された全ての作品は、どのようにして東方とあるいは幻想郷と芥川龍之介の作品を絡めようと考え抜かれて作品ばかりだと思われます。ですので、何をもって芥川龍之介とするのか、はそれほど深く考えなくてもいいのです。勿論、深く考えようと思えば考えられることでしょう。自らがモチーフにした作品はどういう作品なのか、どういう意図があり描かれたのか、何故この表現を用いたのか……。そのようなことを考えて表現したものも、確かに芥川龍之介っぽい作品になると考えられます。ですが、今はそう深く考えるよりも、自らが選んだモチーフ作品を読み返し、敬意をもって作品を完成させれば、十二分に芥川龍之介っぽくなると思うのです。

何故、私がそう思うのか？　という部分につきましては、あまりに紙幅が足りませんので省かせていただきますが、掲載された作品に谷崎潤一郎の影があろうとも、太宰治や三島由

紀夫等々の昭和文学の影があろうとも、それはそれで構わないのです。

芥川龍之介が没した後、堀辰雄や太宰治や坂口安吾といった若い作家達や評論家達が芥川龍之介の自死、あるいは芥川龍之介の残した文学をいかに乗り越えようとしたのか、乗り越えようとしてどのような作品や評論が生み出されたのか。敗北の文学と評され、数々の研究論文が発表され、敗北ではなく闘いであってと評されるようになり、教科書にも採用されるようになり、国際作家としての地位に納まろうとしている現代です

そうして読み継がれてきました。ですので、何をもって芥川龍之介っぽいとするのか、ということは深く考える必要はないのです。芥川龍之介が発表した作品あるいは彼の考えた文学を己ならばどうするかと考え、生み出された作品が良いのです。

芥川龍之介の話は尽きることなくできるでしょう。作品や書簡、交友、研究論文……。芥川龍之介が好きなので、そういう話をするのは確かに面白くありますし楽しくもあります。ですが、私が一番楽しいと感じますのは、どなたかが芥川龍之介の作品を読み、語るのを聞く時でございます。ですので、この合同誌に寄稿された皆様が芥川龍之介を初めて読み、あ

るいは改めて読み返し、何をどう思ったのか聞く。非常に楽しみで胸が踊ります。あるいは、この合同誌を読まれた方が何をどう思ったのか聞く。それもまた非常に楽しみです。

最後となりましたが、寄稿された原稿のモチーフ先は左記の通りです。

ひととせ　上海の馬利亜　南京の基督

藍もどき　勝手な受け皿　杜子春

ガルゾ　目覚め　悪魔

狂史郎　東方邪宗門　邪宗門

ぽんきち　夜来の星　舞踏会

久我暁　魔理沙の形　英雄の器

ガニメデ　くに知らずの赤河童　河童

高坂流　無意識　魔術

近藤貴弥　或阿呆の一生　或阿呆の一生

二〇一七年九月下旬　近藤貴弥

芥川龍之介没後九十年記念合同「東方の人」

発行日　2017年10月22日

原作　東方Project（上海アリス幻樂団）

印刷　ちょ古っ都製本工房

発行者　近藤貴弥（出藍文庫）

連絡先：stkk7.920521@gmail.com

表紙絵：たかはる（1年3組たかはる）

執筆者

ひととせ（四季堂本舗）

藍もどき（東方天翔記CPUダービー処）

ガルゾ（よろづの葉）

狂史郎

ぽんきち（真夏の雪だぬき工房）

久我暁（青猫幻想団）

ガニメデ（ピートライダーズ）

高坂流（妖精時計）

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。